拾遺黒谷語録（和語）

［一・オ］

拾遺黒谷語録巻中 上漢語中 下和語中

目次

登山状 第一
示二或人一詞 第二
津戸返状 第三
示二或女房一法語 第四

獸欣沙門了恵集録

教法流布の世

登山状 第一

源空

［一・ウ］

それ流浪三界のうちいつれの界におもむ」きてか釋尊の出世にあはさりし輪廻四」生のあひたいつれの生をうけてか如來の」説法をきかさりし花嚴開講のむし」ろにもましハらす般若演説の座にもつ」らならす鷲峯説法のにわにものそます」鶴林涅槃のミきりにもいたらすわれ舍衞［二・オ］の三億の家にややとりけんしらす地獄八」熱のそこにやすみけんはつへし〳〵かなし」むへし〳〵まさにいま多生曠劫をへてむま」れかたき人界にむまれて無量劫をおくり」てあひかたき佛教にあへり釋尊の

欽明天皇

昨日もいたずらに暮れぬ、今日もまた虚しく明けぬ

在世に」あはさる事ハかなしミなりといへとも教法」流布の世にあふ事をえたるハこれよろこひ［二・ウ］也たとへハ目しゐたるかめのうき木のあな」にあへるかことしわか朝に佛法流布せし」事も欽明天皇あめのしたをしろし」めして十三年ミつのえさるのとしふゆ十」月一日はしめて佛法わたり給ひしそれ」よりさきにハ如來の教法も流布せさりし」かは菩提の覺路いまたきかすこ、にわれら［三・オ］いかなる宿縁にこたへいかなる善業によりてか」佛法流布の時にむまれて生死解脱のミ」ちをきく事をえたるしかるをいまあひ」かたくしてあふ事をえたりいたつらにあ」かしくらしてやミなんこそかなしけれ」あるいハ金谷の花をもてあそひて遲々た」る春をむなしくくらしあるいは南樓［三・ウ］に月をあさけりて縵々たる秋の夜をい」たつらにあかすあるいは千里の雲にはせて」山のかせきをとりてとしをおくりあるいハ」萬里のなミにうかひてうミのいろくつを」とりて日をかさねあるいは嚴寒にこほり」をしのきて世路をわたりあるいハ炎天に」あせをのこひて利養をもとめあるいハ妻子［四・オ］眷屬に纏ハれて恩愛のきつなきりかたし」あるいは執敵怨類にあひて瞋恚のほむらや」む事なし惣してかくのことくして晝」夜朝暮行住坐臥時としてやむ事な」した、ほしきま、にあくまて三途八難」の業をかさぬしかれハある文にハ一人一日」中八億四千念念念中所作皆是三途業と［四・ウ］いへりかくのことくして昨日も

朝に開くる栄華は夕辺の風に散りやすし

如来の金言

いたつらにく」れぬ今日も又むなしくあけぬいまいくたひ」かくらしいくたひかあかさんとするそれあ」したにひらくる榮花ハゆふへの風にちり」やすくゆふへにむすふ命露ハあしたの日に」きへやすしこれをしらすしてつねに」さかへん事をおもひこれをさとらすして［五・オ］つねにあらん事をおもふしかるあひた」無常の風ひとたひふけハ有爲のつゆなかく」きへぬれハこれを曠野にすてこれをとをき山」におくるかはねハつゐにこけのしたにう」つもれたましゐハひとりたひのそらにま」よふ妻子眷屬ハ家にあれともともなはす」七珍萬寶ハくらにみてれとも益もなした、［五・ウ］身にしたかふものハ後悔のなミた也つゐに」閻魔の廳にいたりぬれハつミの淺深をさた」め業の輕重をかんかへらる法王罪人にと」ひていはくなんち佛法流布の世にむま」れてなんそ修行せすしていたつらに返り」きたるやその時にハわれらいかゝこたへんと」するすみやかに出要をもとめてむなしく［六・オ］返る事なかれ」そも〳〵一代諸教のうち顯宗密宗大乘小」乘權教實教論家部八宗にわかれ義萬差」につらなりてあるいは萬法皆空の宗をとき」あるいハ諸法實相の心をあかしあるいハ五性」各別の義をたてあるいは悉有佛性の理を談」し宗々に究竟至極の義をあらそひ各々に［六・ウ］甚深正義の宗を論すミなこれ經論の實語」也そも〳〵又如來の金言也あるいは機をと、」のへてこれをときあるいハ時をか、みてこれ」をおしへ給

いずれも生死解脱の道

菩提流支・曇鸞・道綽・善導・懐感・少康

へりいつれかあさくいつれかふかき」ともに是非をわきまへかたしかれも教こ」れも教たかひに偏執をいたく事なかれ」説のことく修行せはミなこと〳〵く生死を［七・オ］過度すへし法のことく修行せハともにお」なしく菩提を證得すへし修せすして」いたつらに是非を論すたとへハ目しゐたる人」のいろの淺深を論しみ、しゐたる人のこ」ゑの好惡をいはんかことした、すへからく」修行すへしいつれも生死解脱のミち也し」かるにいまかれを學する人ハこれをそねミこ［七・ウ］れを誦する人ハかれをそしる愚鈍のものこれ」かためにまとひやすく淺才の身これかた」めにわきまへかたしたま〳〵一法におもむ」きて功をつまんとすれハすなハち諸宗のあ」らそひたかひにきたるひろく諸教にわた」りて義を談せんとおもへハ一期のいのちくれ」やすしかの蓬萊方丈瀛州といふなる三の［八・オ］山にこそ不死のくすりハありときけかれを」服してまれいのちをのへて漸々に習ハ、やと思」へともたつぬへきかたもおほへすもろこしに」秦皇漢武ときこへし御門これをき、てたつね」につかハしたりしかとも童男卯女ふね」のうちにしてとし月をおくりき彭祖か七百」歳の法むかしかたりにていまの時につた［八・ウ］へかたし曇鸞法師と申せし人こそ佛法」のそこをきわめたりし人のいのちハあしたを」期しかたしとて佛法をならはんかために」長生の仙の法をハつたへ給ひけれ時に菩提」流支と申す三藏ましましき曇鸞かの」三藏

長生不死の法

聖道浄土の二門

浄土宗

の御まへにまうて、申給やうハ佛法」の中に長生不死の法この土の仙經にすきた
［九・オ］るありやと、ひ給ひけれハ三藏地につわきを」はきての給ハくこの方にハ
いつくんそところ」に長生の法あらんたとひ長年をえてしは」らくしなすともつゐ
に三有に輪廻すと」の給ひてすなハち觀無量壽經をさつけて大」仙の法也これによ
りて修行すれハさらに生」死を解脱すへしとの給ひき曇鸞これを［九・ウ］つたへて
仙法をたちまちに火にやきてこ」れをすつ觀無量壽經によりて淨土の行を」しる
し給ひきその、ち曇鸞道綽善導懷」感少康等にいたるまてこのなかれをつたへ」給
へりそのミちをおもひていのちをのへて大」仙の法をとらんとおもふに又導綽禪師
の安」樂集にも聖道淨土の二門をたて給ふハこの［一〇・オ］心なりその聖道門
といふハ穢土にして煩惱」を斷して菩提にいたる也淨土門といふハ淨土」にむまれ
てかしこにして煩惱を斷して」菩提にいたる也いまこの淨土宗についてこれ」をい
へハ又觀經にあかすところの業因一つに」あらす三福九品十三定善その行しな〳〵
に」わかれてその業まち〳〵につらなれりまつ［一〇・ウ］定善十三觀といふハ日
想水想地想寶樹寶池」寶樓花座像想眞身觀音勢至普觀雜觀こ」れ也つきに散善九品
といふハ一には孝養父母奉」事師長慈心不殺修十善業二にハ受持三歸具」足衆戒不
犯威儀三にハ發菩提心深信因果」讀誦大乘勸進行者也九品ハかの三福の業」を開

定散二善のうちにもれたる往生の行はあるべからず

称名は我らが分なり

雄俊と閻魔

『観無量寿経』

してその業因にあつつふさにハ観経に［一一・オ］見えたり惣してこれをいへハ定散二善の中」にもれたる往生の行ハあるへからすこれに」よりてあるいハいつれにもあれた、有縁の行」におもむきて功をかさねて心にひかん法に」よりて行をはけまハミなこと〳〵く往生をと」くへしさらにうたかひをなす事なかれ」いましハらく自法につきてこれをいは、［一一・ウ］まさにいま定善の観門ハかすかにつらなりて」十三あり散善の業因ハまち〳〵にわかれて九」品ありその定善の門にいらんとすれハすなハち」意馬あれて六塵の境にはすかの散善の門」にのそまんとすれハ又心猿あそんて十悪のえ」たにうつるかれをしつめんとすれともえす」これをと、めんとすれともあたはすいま下三［一二・オ］品の業因を見れハ十悪五逆の衆生臨終に善」知識にあひて一聲十聲阿彌陀佛の名號を」となへて往生すと、かれたりこれなんそわれ」らか分にあらさらんやかの釋の雄俊といひし」人ハ七度還俗の悪人也いのちおハりてのち獄」率閻魔の廳庭にゐてゆきて南閻浮提第」一の悪人七度還俗の雄俊ゐてまいりてはん［一二・ウ］へりと申けれは雄俊申ていはくわれ在生の」時観無量壽經を見しかハ五逆の罪人阿彌」陀ほとけの名號をとなへて極樂に往生すと」まさしくとかれたりわれ七度還俗すといへ」ともいまた五逆をハつくらす善根すくなし」といへとも念佛十聲にすきたり雄俊もし」地獄におちハ三世諸佛忘語のつミにおち給

善導和尚の釈

浄土の要門・別意の弘願

定・散

弘願

信外の軽毛

発遣・来迎

『大経』

ふ［一三・オ］へしと高聲にさけひしかハ法王ハ理におれて」たまのかふりをかたふけてこれをおかミ彌陀」ハちかひによりて金蓮にのせてむかへ給ひき」いはんや七度還俗におよはさらんをやいはん」や一形念佛せんをや男女貴賤行住坐臥」をえらはす時處諸縁を論せすこれを修す」るにかたからす乃至臨終に往生を願求する［一三・ウ］にそのたよりをえたりと楞嚴の先德のか」きおき給へるま事なるかなや又善導和尚」この觀經を釋しての給ハく娑婆の化主」その請によるかゆへにひろく淨土の要門を」ひらき安樂の能人別意の弘願をあらハす」その要門といハすなはちこの觀經の定散二門」これ也定ハすなハちおもひをやめてもて心を［一四・オ］こらし散ハすなハち惡を廢して善を修す」この二行をめくらして往生をもとめねか」ふ也弘願といハ大經にとくかことし一切善惡」の凡夫のむまるゝ事をうるものミな阿彌陀」佛の大願業力に乗して增上縁とせすといふ」事なし又ほとけの密意弘深にして教文」さとりかたし三賢十聖もはかりてうかゝ［一四・ウ］ふところにあらすいはんやわれ信外の輕毛」也さらに旨趣をしらんやあふいておもんみ」れハ釋迦ハこの方にして發遣し彌陀ハかのく」により來迎し給ふこゝにやりかしこによは」ふあにさらさるへけんやといへりしかれハ定」善散善弘願の三門をたて給へりその弘願」といハ大經に云設我得佛十方衆生至心信樂［一五・オ］欲生我國乃至十念若不生者不取

善導大師の釈

正覺唯」除五逆 誹謗正 法といへり善導釋していはく」若 我成 佛十方衆生 稱我名號下至十聲 若」不生 者不取正 覺彼佛今現在世成 佛當知」本誓重願 不虛衆生 稱念必得往生 云 觀 經」の定 散兩 門をときおハりて佛告阿難汝好」持是語々々者卽是持無量 壽佛名 云こ［一五・ウ］れすなはちさきの弘願の心 也又おなしき」經の眞身觀には彌陀身色如金山相好光」明 照十方唯有念佛蒙光 攝當知本願 最爲」强 云 又これさきの弘願のゆへなり阿彌陀經」にいはく不可以少善根福德因緣得生 彼國」若 善男子善女人聞說阿彌陀佛執持名 號」若 一日若 二日乃至七日一心不亂其人 命［一六・オ］終時心不顚倒卽得往生 云 つきの文に六方」におの〳〵恆河沙の佛まし〳〵て廣 長 舌相を」出してあまねく三千大千世界におほひて」誠 實の事也信せよと證 誠し給へりこれ又」さきの弘願のゆへ也又般舟三昧經にいはく」跋陀和菩薩阿彌陀にとひていはくいかなる」法を行してかかのくに、むまるへきと阿彌［一六・ウ］陀ほとけの給ハくわかくに、來生せんとおもハん」ものハつねに御名を念してやすむ事なかれ」かくのことくしてわかくに、來生する事をう」との給へりこれ又弘願のむねをかのほとけみ」つからの給へり又五臺山の大聖 竹林寺の」記にいはく法照禪師清 涼 山にのほりて大聖」竹林寺にいたるこ、に二人の童子あり一人［一七・オ］をハ善財といひ一人をハ難陀といふこの二人の」童子法照禪師をみちひきて寺

『阿弥陀経』

『般舟三昧経』

文殊菩薩と法照禪師

のうちにいれ」て漸々に講堂にいたりて見れハ普賢菩薩」無數の眷屬に圍繞せられて坐し給へり文」殊師利ハ一萬の菩薩に圍繞せられて坐し」給へり法照禮してとひたてまつりていはく」末法の凡夫ハいつれの法をか修すへき文殊師［一七・ウ］利こたへての給ハくなんちすてに念佛せよ」いままさしくこれ時也と法照又とひていはく」まさにいつれをか念すへきと文殊又の給ハく」この世界をすきて西方に阿彌陀佛まし」ますかのほとけまさに願ふかくまします」なんちまさに念すへしと大聖文殊法照禪」師にまのあたりの給ひし事也すへてひろく［一八・オ］これをいへハ諸教にあまねく修せしめたる法」門也つふさにあくるにいとまあらすしかるを」このころ念佛のよにひろまりたるによりて」佛法うせなんとすと諸宗の學者難破をい」たすによりて人おほく念佛の行を廢すと」きこゆいまた心えすはんへり佛法ハこれ萬年」也うしなはんとおもふとも佛法擁護の諸［一八・ウ］天善神まほり給ふゆへに人のちからにてハか」なふへからすかの守屋の大臣か佛法を破滅」せんとせしかとも法命いまたつきすして」いまにつたハるかことしいはんや無智の道」俗在家の男女のちからにて念佛を行する」によりて法相三論も隱沒し天台花嚴も」廢する事なしかハあるへき念佛を行せ［一九・オ］すしてゐたらハこのともからハ一宗をも興」隆すへきかはたゝいたつらに念佛の業を廢し」たるはかりにてまたくそれ諸宗のおきろを」もさくるへからす

諸宗も念仏も仏法なり

しかれハこれおほきなる」損にあらすや諸宗のふかきなかれをくむ南」都北京の學者兩部の大法をつたへたる本」寺本山の禪徒百千萬の念佛世にひろま［一九・ウ］りたりとも本宗をあらたむへきにあらす又佛」法うせなんとすとて佛法を廢せハ念佛ハこ」れ佛法にあらすやたとへハ虎狼の害をにけ」て師子にむかひてはしらんかことし餘」行を謗し念佛を謗せんおなしくこれ逆」罪也とらおほかみに害せられん師子に害せ」られんともにかならす死すへしこれをも謗［二〇・オ］すへからすかれをもそねむへからすともにミな」佛法也たかひに偏執する事なかれ像法」決疑經にいはく三學の行人たかひに毀謗し」て地獄にいる事ときやのことしといへり又大」論にいはく自法を愛染するゆへに他人を毀」呰すれハ持戒の行人も地獄の苦をまぬか」れすといへり又善導和尚のの給ハく

［二〇・ウ］

世尊説法時將了　殿懃付二屬彌陀名一」
五濁增時多二疑謗一　道俗相簡不レ用レ聞一」
見レ有二修一行一起二瞋毒一　方一便破壞競生レ怨二」
如レ此生盲闡提輩　毀二滅頓教一永沈淪」
超二一過大一地微塵劫一　未レ可レ得レ離二三途身一」

仏意に背くこと

十悪を犯して一念を申せと勧むるにはあらず

十重を持ちて十念を称えよ

といへり念佛を修せんものハ餘行をそしる」へからすそしらハすなハち彌陀の悲願に［二一・オ］そむくへきゆへなり餘行を修せん物も念佛」をそしるへからす又諸佛の本誓にたかふ」かゆへなりしかるをいま眞言止觀の窓の」まへにハ念佛の行をそしる一向專念の床」のうゑにハ諸餘の行をそしるともに我々偏」執の心をもて義理をたてたかひにおの〳〵」是非のおもひに住して會釋をなすあに［二一・ウ］これ正義にかなはんやミなともに佛意にそ」むけりつきに又難者のいはく今來の念佛」者わたくしの義をたて、惡業をおそる、ハ彌」陀の本願を信せさる也數遍をかさぬるは」一念の往生をうたかふ也行 業をいへハ一念十」念にたりぬへしかるかゆへに數遍をつむへか」らす惡業をいへハ四重五逆なをむまる、ゆへに［二二・オ］諸惡をは、かるへからすといへりこの義またく」しかるへからす釋 尊の說法にも見へす善」導の釋にもあらすもしかくのことく存せん」ものハ惣してハ諸佛の御心にたかふへし別」してハ彌陀の本願にかなふへからすその五逆」十惡の衆生の一念十念によりてかのくにに」往生すといふハこれ觀 經のあきらかなる文也［二二・ウ］た、し五逆をつくりて十念をとなへよ十惡」をおかして一念を申せとす、むるにハあらす」それ十重をたもちて十念をとなへよ四十八」輕をまほりて四十八願をたのむハ心にふかく」こひねかふところ也およそいつれの行をもハ」らにすとも心に戒行をたもちて浮囊をま」ほ

三世諸仏の通戒

信を一念に生まると取りて行をば一形励むべし

穢土の正覚・浄土の正覚

るかことくにし身の威儀に油鉢をかた［二三・オ］ふけすは行として成就せすといふ事なし」願として圓滿せすといふ事なششかる」をわれらあるいハ四重をおかしあるいハ十」惡を行すかれもおかしこれも行す一人と」してま事の戒行を具したる物ハなし」諸惡莫作諸善奉行ハ三世の諸佛の通戒」也善を修するものハ善趣の報をえ惡を行［二三・ウ］する物ハ惡道の果を感すといふこの因果の」道理をきけともきかさるかことしはしめ」ていふにあたハすしかれとも分にしたかひて」惡業をとゝめよ緣にふれて念佛を行し往」生を期すへし惡人をすてられすハ善人な」んそきらはんつミをおそる、ハ本願をうた」かふとこの宗にまたく存せさるところ也つきに［二四・オ］一念十念によりてかのくに、往生すといふハ釋」尊の金言也觀經のあきらかなる文也善導」和尚の釋にいはく下至十聲等定得往生乃」至一念無有疑心故名深心といへり又いはく行」住坐臥不問時節久近念々不捨者是名正定」之業順彼佛願故といへりしかれハ信を一念」にむまるとゝりて行をハ一形はけむへしとす、［二四・ウ］むる也彌陀の本願を信して念佛の功をつ」もり運心としひさしくハなんそ願力を信」せすといふへきやすへて博地の凡夫彌陀の淨」土にむまれん事他力にあらすハミな道たえ」たるへき事也およそ十方世界の諸佛善逝」穢土の衆生を引導せんかために穢土にし」て正覺をとなへ淨土にして正覺をなりて［二五・オ］しかも穢土の衆

生を引導せんといふ願をた」て給へりその穢土にして正覺をとなふれハ隨」類應同の相をしめすかゆへにいのちなかゝ」らすしてとく涅槃にいりぬれハ報佛報土に」して地上の大菩薩の所居也未斷惑の凡夫」ハたゝちにむまるゝ事あたハすしかるを」いま淨土を莊嚴し佛道を修行するハ凡［二五・ウ］位ハもと造惡不善のともから也輪轉きハまり」なからんを引導し破戒淺智のやからの出離」の期なからんをあはれまんかため也もし」その三賢を證し十地をきわめたる久行の」聖人深位の菩薩の六度萬行を具足し諸波」羅密を修行してむまるゝといはハこれ大」悲の本意にあらすこの修因感果のことわり［二六・オ］を大慈大悲の御心のうちに思惟して年序を」そらにつもりて星霜五劫におよへりしか」るを善巧方便をめくらして思惟し給へ」りしかもわれ別願をもて淨土に居して」博地底下の衆生を引導すへしその衆生の」業力によりてむまるゝといはゝかたかるへし」我須ハ衆生のために永劫の修行をゝくり僧祇の苦行を［二六・ウ］めくらして萬行萬善の果德圓滿し自覺」覺他の覺行窮滿してその成就せんところ」の萬德無漏の一切の功德をもてわか名號と」して衆生にとなへしめん衆生もしこれに」おいて信をいたして稱念せはわか願にこたへ」てむまるゝ事をうへし名號をとなへハむま」るへき別願をおこしてその願成就せハ佛に［二七・オ］なるへきかゆへ也この願もし滿足せすは永劫を」ふともわれ正覺をとらしたゝ

諸仏称揚の願と念仏往生の願

四十八願はすべて成就せり

し未來惡世」の衆生憍慢懈怠にしてこれにおいて信を」おこす事かたかるへし一佛二佛のとき給ハん」におそらくハうたかふ心をなさん事をねかハく」ハわれ十方諸佛にこと〳〵くこの願を稱揚せら」れたてまつらんとちかひて第十七の願に設［二七・ウ］我得佛十方無量諸佛不悉咨嗟稱我名者」不取正覺とたて給ひてつきに第十八願の」乃至十念若不生者不取正覺とたて給へり」そのむね無量の諸佛に稱揚せられたてま」つらんとたて給へり願成就するゆへに六方に」おの〳〵恆河沙のほとけまし〳〵て廣長舌相」を出してあまねく三千大千世界におほひ［二八・オ］てミなおなしくこの事をま事なりと證誠」し給へり善導これを釋しての給ハくもし」この證によりてむまる、事をえすハ六方の諸」佛ののへ給へるした口よりいておハりてのちつ」ゐに口に返りいらすして自然にやふれミた」れんとの給へりこれを信せさらん物ハすなはち」十方恆沙の諸佛の御したをやふる也よく〳〵［二八・ウ］信すへし一佛二佛の御したをやふらんたに」もありいかにいはんや十方恆沙の諸佛をや」大地微塵劫を超過すともいまた三途の身を」はなるへからすとの給へり彌陀の四十八願と」いは無三惡趣不更惡趣乃至念佛往生等の」願これ也すへて四十八願のなかにいつれの願か」一つとして成就し給ハぬ願あるへき願こと［二九・オ］に不取正覺とちかひてい」ますてに正覺をな」り給へる故也然を無三惡趣の願を信せすしてかの國に三

一念疑退の心をおこさざれ

惡道」ありと云物ハなし不更惡趣の願を信せすして」かのくに、衆生いのちおハりてのち又惡道に」返るといふ物ハなし悉皆金色の願を信せす」してかのくにの衆生ハ金色なるもあり白色」なるもありといふ物ハなし無有好醜の願［二九・ウ］を信せすしてかのくにの衆生ハかたちよきも」ありわろきもありといふ物ハなし乃至天」眼天耳光明壽命およひ得三法忍の願にい」たるまてこれにおいてうたかひをなす物」ハいまたはんへらすた、第十八願において」念佛往生の願一つを信せさる也この願をう」たかハ、餘の願をも信すへからす餘の願を［三〇・オ］信せはこの一願をうたかふへけんや法藏比丘」いまたほとけになり給ハすといは、これ謗法に」なりなんかしもし又なり給へりといは、い」か、この願をうたかふへきや四十八願の彌陀」善逝ハ正覺を十劫にとなへ給へり六方恆沙の」諸佛如來ハ舌相を三千世界にのへ給へりたれか」これを信せさるへきや善導この信を釋して［三〇・ウ］の給ハく化佛報佛若一若多乃至十方に遍」してひかりをか、やかしたをはきてあま」ねく十方におほひてこの事虛妄なりとの」給ハんにも畢竟して一念疑退の心をおこ」さしとの給へりしかるをいま行者たち異」學異見のためにたやすくこれをやふらる」いかにいはんや報佛化佛の、給ハんをやそも〳〵［三一・オ］この行をすてハいつれのおこなひにかおもむ」き給ふへき智慧なけれハ聖教をひらくに」まなこくらし財寶なけれハ

布施を行するに」ちからなしむかし波羅奈國に太子あり」き大施太子と申き貧人をあはれミてくら」をひらきてもろ〳〵のたからを出してあた」へ給ふにたからハつくれともまつしき物ハ［三一・ウ］つくへからすこ、に太子うミのなかに如意寶」珠ありときく海にゆきてもとめてまつし」きたミにたからをあたへんとちかひて龍宮に」ゆき給ふに龍王おとろきあやしミておほ」ろけの人にハあらすといひてみつからむかひて」たからのゆかにすえたてまつりはるかにきたり」給へる心さし何事をもとめ給ふそと、へハ太［三二・オ］子の給ハく閻浮提の人まつしくてくるしむ」事おほし王のもと、りのなかの寶珠をこ」はんかためにきたる也との給へハ王のいは」くしからハ七日こ、にと、まりてわか供養を」うけ給へその、ちたからをたてまつらんと」いふ太子七日をへてたまをえ給ひぬ龍神」そこよりおくりたてまつるすなはち本［三二・ウ］國のきしにいたりぬこ、にもろ〳〵の龍神」なけきていはくこのたまハ海中のたから」也なをとり返してそよかるへきとさたむ」海神人になりて太子の御まへにきたりて」いはく君世にまれなるたまをえ給へり」とくわれに見せ給へといふ太子これを見せ」給ふにうはひとりてうみへいりぬ太子な［三三・オ］けきてちかひていはくなんちもしたまを」返さすんハうみをくミほさんといふ海神いて、」わらひていはくなんちハもともおろかなる」人かなそらの日をハおとしもしてんはやき」せを

信の手をもて疑謗の難を汲め

ハと、めもしてんうミのミつをハつく」すへからすといふ太子の給ハく恩愛のたへ」かたきをもなをと、めんとおもふ生死の［三三・ウ］つくしかたきをもなをつくさんとおもふ」いはんやうミのミつおほしといふともかきり」ありもしこの世にくミつくさすハ世、をへ」てもかならすくミつくさんとちかひてかい」のからをとりてうミのミつをくむちかひの」心まことなるかゆへにもろ〳〵の天人こと〳〵く」きたりてあまのハころものそてにつ、みて［三四・オ］鐵圍山のほかにくみをく太子一度二度」かいのからをもてくみ給ふに海水十分か八」分ハうせぬ龍王さわきあはて、わかすミか」むなしくなりなんとすとわひてたまを返」したてまつる太子これをとりてミやこに」返りてもろ〳〵のたからをふらして閻」浮提のうちにたからをふらさ、るところなし［三四・ウ］くるしきをしのきて退せさりしかハこれ」を精進波羅密といふむかしの太子ハ萬」里のなミをしのきて龍王の如意寶珠を」え給へりいまのわれらハ二河の水火をわけ」て彌陀本願の寶珠をえたりかれハ龍神」のくゐしかためにうは、れこれハ異學異見の」ためにうは、るかれハかいのからをもて大海を［三五・オ］くみしかハ六欲四禪の諸天きたりておなし」くくみきこれハ信の手をもて疑謗の難を」くまは六方恆沙の諸佛きたりてくミし給」ふへしかれハ大海のミつやうやくつきしかハ」龍宮のいらかあらはれて如意寶珠を返し」とりきこれハ疑難のなミこと

〳〵くつきなハ」謗家のいらかあらはれて本願の寶珠を返［三五・ウ］しとるへしかれハ返しとりて閻浮提にして」貧窮のたミをあはれミきこれハ返しとりて」極樂にむまれて博地のともからをみちひく」へしねかはくハもろ〳〵の行者彌陀本願の」寶珠をいまたうはひとられさらん物ハふかく」信心のそこにおさめよもしすなハちとられ」たらんものハすミやかに深信の手をもて疑［三六・オ］謗のなミをくめたからをすて、手をむなし」くして返る事なかれいかなる彌陀か十」念の悲願をおこして十方の衆生を攝取し」給ふいかなるわれらか六字の名號をとなへ」て三輩の往生をとけさらん永劫の修行ハ」これたれかためそ功を未來の衆生にゆつり」給ふ超世の悲願ハ又なんの料そ心さしを［三六・ウ］末法のわれらにおくり給ふわれらもし往」生をとくへからすハほとけあに正覺をなり」給ふへしやわれら又往生をとけましや」われらか往生ハほとけの正覺によりほとけ」の正覺ハわれらか往生による若不生者」のちかひこれをもてしり不取正覺の」ことはかきりあるをや云云

我らが往生は仏の正覚により、仏の正覚は我らが往生による

［三七・オ］

示二或人一詞　第二」

西に阿弥陀仏おわします

一しとはこの時西にむかふへからす又西をう」しろにすへからすきたミなミにむかふへし」おほかたうち〳〵ゐたらんにもうちふさんに」もかならす西にむかふへしもし

まず阿弥陀仏に預けまいらすべし

四十八願のまなこ・きも・たましい

ゆゝしく」便宜あしき事ありて西をうしろにす」る事あらは心のうちにわかうしろハ西也［三七・ウ］阿彌陀ほとけのおハしますかた也たゝいま」あしさまにてむかはねとも心をたにも西」方へやりつれハそゝろに西にむかはて極樂を」おもはぬ人にくらふれハそれにまさる也」

一孝養の心をもてちゝはゝをおもくしお」もはん人ハまつ阿彌陀ほとけにあつけまい」らすへしわか身の人となりて往生をねか［三八・オ］ひ念佛する事ハひとへにわか父母のやしな」ひたてたれハこそあれわか念佛し候功を」あはれミてわか父母を極樂へむかへさせおハ」しまして罪をも滅しましませとおもハ」はかならす〳〵むかへとらせおハしまさんする」也されハ唐土に妙雲といひし尼ハおさなく」して父母におくれたりけるか三十年ハかり［三八・ウ］念佛して父母をいのりしかハともに地獄の」苦をあらためて極樂へまいりたりける也」

一善導和尚の往生禮讃に本願をひきていはく」若我成佛　十方衆生稱二我名一號一下至二十聲一若」不レ生者　不レ取二正一覺一彼佛今現　在レ世一成一佛　當レ知」本一誓重　願不レ虛一　衆一生稱一念　必得二往生一文」

この文をつねにくちにもとなへ心にもうかへ［三九・オ］眼にもあて、彌陀の本願を決定　成就して」極樂世界を莊嚴したて、御目を見まは」してわか名をとなふる人

やあると御らんし」御ミ、をかたふけてわか名を稱する物やある」とよるひるきこしめさる、也されは一稱も」一念も阿彌陀にしられまいらせすといふ事」なしされハ攝取の光明ハわか身をすて給ふ［三九・ウ］事なく臨終の來迎ハむなしき事なき也」この文ハ四十八願のまなこ也肝なり神也四十」八字にむすひたる事ハこのゆへ也よく〳〵身を」もきよめ手をもあらひてす、をもとり袈」裟をもかくへし不淨の身にて持佛堂へい」るへからすこの世の主なんとをたにもうやま」ひおそる、事にてあるにまして無上世［四〇・オ］尊のもろ〳〵の大菩薩にもうやまはれ給へ」るにわれらか身にいかてかなめにもあたり」まいらすへき三界の諸天もかふへをかたふけ」給ふいかにいはんやわれらか身をや　又つミを」おそる、ハ本願をかろしむる也身をつ、」しみてよからんとするハ自力をはけむ也」といふ事ハものもおほへぬあさましき［四〇・ウ］ひか事也ゆめ〳〵ミ、にもき、いるへからす」つゆちりハかりももちゐましき事也」はしめ淨土三部經より唐土日本の人」師の御作の中にもまたくなき事とも」を心にまかせてわかおもふさまにわろか」らんとていひいたしたる事也一定とし」て三惡道におちんする事也一代聖教の［四一・オ］中にふつとなき事也五逆十惡の罪人」の臨終の一念十念によりて來迎にあつか」る事ハそのつミをくゐかなしミてたすけ」おハしませとおもひて念佛すれハ彌陀」如來願力をおこして罪を滅し來迎

罪を悔いて念仏せよ

し」ましますも本願のまゝにかきてまいらせ」候このまゝに信して御念佛候へしかま

生死を出る道は極楽に往生するよりほかにはなし

[四一・ウ]えて〳〵たうとき念佛者にておハしませ」あなかしこ〳〵」

往生の業にとりて念仏にしくことはなし

津戸三郎へつかはす御返事　第二

御文くハしくうけ給ハり候ぬ念佛の事召」問ハれ候はんにハなしかハくハしき事を」は申させ給ふへきけにもいまたくハしく」もならはせ給ハぬ事にて候へハ専修雑修[四二・オ]の間の事ハくハしき沙汰候はすともいかや」うなる事そと召問ハれ候ハ、法門のくは」しき事ハしり候はす御京上の時う」け給ハりわたり候て聖りのもとへまかり候て」後世の事をハいかゝし候へき在家のものな」んとの後生たすかるへき事ハなに事か候」らんと問候しかハ聖の申候し様はおほ[四二・ウ]かた生死をはなる、ミち様々におほく候へ」ともその中にこのころの人の生死をいつる」道ハ極楽に往生するよりほかにハこと道ハ」かなひかたき事也これほとけの衆生をす、」めて生死をいたさせ給ふへき一つの道也」しかるに極楽に往生する行又様々にお」ほく候へともその中に念佛して往生す[四三・オ]るよりほかにハこと行ハかなひかたき事に」てある也そのゆへハ念佛ハこれ彌陀の一切衆」生のためにみつからちかひ給ひたりし本」願の行なれハ往生の業にとりてハ念佛にし」く事ハなしされハ往生せ

専修と雑修

五種正行と正助二行

んとおもハ、念佛」をこそハせめと申候きいかにいはんや又最」下のもの、法門をもしらす智慧もなからん［四三・ウ］物ハ念佛のほかにハ何事をしてか往生」すへきといふ事なしわれおさなくより法」門をならひたるものにてあるたにも念佛」よりほかに何事をして往生すへしとも」おほへすた、念佛ハかりをして彌陀の本」願をたのミて往生せんとハおもひてある也」まして最下の物なんとハ何事かあらん［四四・オ］と申されしかハふかくそのよしをたのミて」念佛をハつかまつり候也と申させ給ふへし」又この念佛を申す事ハた、わか心より彌」陀の本願の行なりとさとりて申事にも」あらす唐の世に善導和尚と申候し人往」生の行業において専修雑修と申す二つの行」をわかちてす、め給へる事也専修といふハ念［四四・ウ］佛也雑修といふは念佛のほかの行也専修の」ものハ百人ハ百人なから往生し雑修の物ハ」千人か中にわつかに一二人ある也唐土に又」信仲と申物こそこのむねをしるして専」修正業文といふ文をつくりて唐土の諸人を」す、めたれその文ハしやうせう房なんとのも」とにハ候らんそれをもちてまいらせ給ふへ［四五・オ］し又専修につきて五種の専修正行といふ」事ありこの五種の正行につきて又正助二行」をわかてり正業といふハ五種の中に第四の念」佛也助業といふハその中の四つの行也いま決」定して淨土に往生せんとおもハ、専雑二修」の中にハ専修の教によりて一向に念佛をすへ」し正助

善導和尚は弥陀の化身

往生しなんとおぼし召すべし

二業の中にハ正業のすゝめによりて［四五・ウ］ふた心なくた、第四の稱名念佛をすへし」と申し候しかハくハしきむねふかき心をハ」しり候はすさてハ念佛ハめてたき事にこ」そあるなれと信し候て申候ハかりに候件」の人の善導和尚と申人ハうちある人にも」候はす阿彌陀ほとけの化身にておハしまし」候なれハおしへす、めさせ給ハん事よも［四六・オ］ひか事にてハ候ハしとふかく信して念佛」ハつかまつり候也そのつくらせ給て候なる文」ともおほく候なれとも文字もしり候はぬ」ものにて候へハた、心ハかりをき、候て後生や」たすかり候往生やし候とて申候程に」ちかきものとも見うらやミ候て少々申す」ものとも候也とこれほとに申させ給ふへし［四六・ウ］中〳〵くハしく申させ給ハ、あやまちもあ」りなんとしてあしき事もこそ候へと」おほへ候ハいか、候へき様々に難答をしる」してと候へとも時にのそミてハいかなるこ」とハともか候はんすらん書てまいらせて候」はんもあしく候ぬへく候た、よく〳〵御」はからひ候て早晩よきやうにこそハはか［四七・オ］らはせ給ひ候ハめ又念佛申すへからす」とおほせられ候とも往生に心さしあら」ん人ハそれにより候まし念佛よく〳〵」申せとおほせられ候とも道心なからん」物ハそれにより候まし」とにかくにつけて」もこのたひ往生しなんと人をハしらす」御身にかきりてハおほしめすへしわさと［四七・ウ］はる〳〵と人あけさせ給ひて候こそ返〳〵」下人も不便

に候へなを〳〵召し問ハれ候ハん」時にハこれより百千申て候はん事ハ時に」もかなひ候ましけれハ無益の事にて候」はからひてよきやうに早晩にしたかひ」て申させ給はんによもひか事ハ候ハし」眞字假字にひろくかきてまいらせ候はんハ［四八・オ］もてのほかにひろく文をつくり候はんする」事にて候へハにハかにすへき事にても候ハす」それハ又中〳〵あしき事にても候ぬへし」たゝいと子細ハしり候ハすこれほとにきゝて」申候也と申させ給ひ候ハんに心候はん人ハ」さりとも心え候ひなん又道心なからん人ハ」いかに道理百千萬わかすともよも心え候ハし［四八・ウ］殿ハ道理ふかくしてひか事おハしまさ」ぬ事にて候と申しあひて候へハこれらほ」とにきこしめさんに念佛ひか事にて」ありけりいまハな申しそとおほせらるゝ事」ハよも候ハしさらさらん人ハいかに申すとも思」とも無益の事にてこそ候はんすれ何事」も御文にハつくしかたく候あなかしこ〳〵

［四九・オ］

十月十八日」

おほつかなくおもひまいらせつる程にこの御」文返〳〵よろこひてうけ給ハり候ぬさても」專修念佛の人ハよにありかたき事にて候」にその一國に三十餘人まて候らんこそまめ」やかにあはれに候へ京邊なんとのつねにき」きならひかたハらをも見なら

道心なからん人
はいかに道理百
千万わかすとも
よも心得じ

專修念仏は世に
有り難し

熊谷の入道

悪人・善人・愚人も等しく念仏すれば往生す

ひ候ひぬへき［四九・ウ］ところにて候たにもおもひきりて専修念」佛をする人ハありかたき事にてこそ候」に道綽禪師の平州と申候ところにこそ」一向念佛の地にてハ候に専修念佛三十」餘人ハよにありかたくおほへ候ひとへに御ち」から又くまかやの入道なんとのはからひにて」こそ候なれそれも時のいたりて往生すへき［五〇・オ］人のおほく候へきゆへにこそ候なれ縁なき」事ハわさと人のすゝめ候にたにもかなハぬ」事にて候に子細もしらせ給ハぬ人なん」とのおほせられんによるへき事にても候」はぬにもとより機縁純熟して時いたり」たる事にて候へハこそさ程に専修の人な」んとハ候らめとおしはかりあはれにおほ［五〇・ウ］へ候たゝし無智の人にこそ機縁にしたか」ひて念佛をハすゝむる事にてハあれと申」候なる事ハもろ〳〵の僻事にて候阿彌陀」ほとけの御ちかひにハ有智無智をもえらハ」す持戒破戒をもきらはす佛前佛後の」衆生をもえらはす在家出家の人をも」きらはす念佛往生の誓願ハ平等の慈［五一・オ］悲に住しておこし給ひたる事にて候」へハ人をきらふ事ハまたく候ハぬ也されハ」觀無量壽經にハ佛心と者大慈悲是なりと」ときて候也善導和尚この文をうけてハこの」平等の慈悲をもてあまねく一切を攝す」と釋し給へる也一切のことはひろくして」もるゝ人候へからす釋迦のすゝめ給も惡人［五一・ウ］善人愚人もひとしく念佛すれハ往生すと」すゝめ給へる也されハ念佛往生の願はこれ彌」陀

弥陀利生の本願
釈迦出世の本懐

法然上人の御療治

正月の別時念仏

如來の本地の誓願なり餘の種々の行ハ」本地のちかひにあらす釋迦如來の種々の」機縁にしたかひて様々の行をとかせ給」ひたる事にて候へハ釋迦も世にいて給ふ心ハ」彌陀の本願をとかんとおほしめす御心にて［五二・オ］候へとも衆生の機縁人にしたかひてとき」給ふ日ハ餘の種々の行をもとき給ふハこれ隨」機の法なり佛の自らの御心のそこにハ候は」すされハ念佛ハ彌陀にも利生の本願釋」迦にも出世の本懐也餘の種々の行にハ似す」候也これハ無智のものなれハといふへからす又」要文の事書てまいらせ候へし又くまかや［五二・ウ］の入道の文□これへとりよせ候てなをすへき」事の候へハその、ちかきてまいらせ候へしなに」事も御文に申つくすへくも候ハすのちの」便宜に又〳〵申候へし」

九月廿八日」

まつきこしめすま、にいそきおほせられて」候御心さし申つくしかたく候この例なら［五三・オ］ぬ事ハことからはむつかしき様に候へとも」當時大事にて今日あす左右すへき事にて」はさりなからも候はぬにとしころの風のつ」もりこの正月に別時念佛を五十日申て候」しにいよ〳〵風をひき候て二月の十日ころよ」りすこし口のかはく様におほへ候しか二月」の廿日ハ五十日になり候しかはそれまてと［五三・ウ］おもひ候てなをしゐて候し程にその事」かまさり候て水なんとのむ事になり又身の」い

たく候事なんとの候しか今日まてやミも」やり候はすなかひきて候へとも又たゝいま」いかなるへしともおほへぬ程の事にて候也」醫師の大事と申候へハやいとうふた、ひし」湯にてゆて候又様々の唐のくすりともたへ［五四・オ］なんとして候氣にやこのほとはちりハかり」よき様なる事の候也左右なくのほるへき」なんと仰られて候こそよにあはれに候へ」さ程とをく候程にハたとひいかなる事にて」ものほりなんとする御事ハいかてか候へきいつ」くにても念佛してたかひに往生し候ひ」なんこそめてたくなかきハかり事にてハ候［五四・ウ］はめ何事も御文にハつくしかたく候又〳〵」申候へし」

四月廿六日」

わたくしにいはくこれハ命をおしむ御」療治にハあらす御身おたしくして念」佛申させ給□んかためなり下卷の用心」抄のおハりを見あはすへし」

道光の註記

［五五・オ］

念仏の行者の存じそうろうべき様

示二或女房一法語第四」

念佛行者のそんし候へきやうハ後世おそ」れ往生おねかひて念佛すれハおはるとき」かならすらいかうせさせ給よしをそんして」念佛申よりほかのこと候はす三心と申候も」ふさねて申ときハたゝ一の願心にて候なりそ」のねかふこゝろのいつはらすか

九品と三心

他力

さらぬかたおハ［五五・ウ］至誠心と申候このこゝろまことにて念佛すれ」ハ臨終にらいかうすといふことを一念もうた」かはぬかたを深心とは申候このうへわか身も」かの土へむまれむとおもひ行業おも往生の」ためとむくるを迴向心とは申候なりこのゆへ」にねかふこゝろいつはらすしてけに往生せ」んとおもひ候へハおのつから三心はくそくす［五六・オ］ることにて候なりそも〳〵中品下生ニらいか」うの候はぬことハあるましけれハとかれぬに」てハ候はす九品往生ニおの〳〵ミなあるへきこと」のりやくせられてなきことも候なりせんた」うの御こゝろハ三心も品々にわたりてあるへ」しと見えて候品々ことにおほくのこと候へとも」三心とらいかうとはかならすあるへきにて候［五六・ウ］なり往生おねかはん行者ハかならす三心を」おこすへきにて候へハ上品上生ニこれをとき」てよの品々おもこれになすらへてしるへし」と見えて候又われら戒品のふねいかたもや」ふれたれハ生死の大海おわたるへき縁も候」はす智恵のひかりもくもりて生死のやミ」をてらしかたけれハ聖道の得道にもも［五七・オ］れたるわれらかためにほとこし給他力と」申候ハ第十九のらいかうの願にて候へハ文」に見へす候ともかならすらいかうハあるへき」にて候なりゆめ〳〵御うたかひ候へからす」あなかしこ〳〵　源空」

拾遺黒谷語録巻中（しうゐくろたにことうくわんちう）

［一・オ］

拾遺黒谷語録巻下

上漢語中
下和語」

●念佛往生 義第一」
●東大寺十問答第二」
●御消息第三四通」
●往生 用心第四」

∴念佛往生 義 第一

［一・ウ］

念佛往生と申事ハ彌陀の本願にわか名」號をとなへんものわかくに、むまれすとい」はハ正覺をとらしとちかひてすてに正」覺をなり給へるかゆへにこの名號をとな」ふるものハかならす往生する事をうこ」のちかひをふかく信して乃至一念もう」たかはさるものハ十人ハ十人なからむまれ［二・オ］百人ハ百人なからむまる念佛を修すといへ」ともうたかふ心あるものハむまれさるなり」世間の人のうたかひに種々のゆへを出たせ」りあるいハわか身罪おもけれハたとひ念佛」すとも往生すへからす

念仏を修すといえども疑う心あるものは生まれず

獻欣沙門了惠集録」

罪障の重きは念仏すとも往生すべからずとは疑うべからず

とうたかひあるいハ念」佛すとも世間のいとなミひまなけれハ往生」すへからすとうたかひあるいハ念佛すれとも［二・ウ］心猛利ならされハ往生すへからすとうたか」ふなりこれらハ念佛の功能をしらすし」てこれらのうたかひをおこせり罪障のお」もけれハこそ罪障を滅せんかために念佛」をハつとむれ罪障おもけれハ念佛すとも」往生すへからすとハうたかふへからすたとへハ」やまひおもけれハくすりをもちゐるかこ［三・オ］としやまひおもけれハとてくすりをもち」ゐすハそのやまひいつかいえむ十惡五逆を」つくれる物も知識のおしへによりて一念十」念するに往生すと、けり善導ハ一聲稱念」するにすなハち多劫のつミをのそくとのた」まへりしかれハ罪障のおもきハ念佛すと」も往生すへからすとハうたかふへからす又［三・ウ］善根なけれハこの念佛を修して無上の」功德をえんとす餘の善根おほくハたとひ念」佛せすともたのむかたもあるへししか」れハ善導ハわか身をハ善根薄少なりと信」して本願をたのミ念佛せよとす、め給」へり經に一たひ名號をとなふるに大利をう」とすすなハち無上の功德をうと、けりいかに［四・オ］いはんや念々相續せんをやしかれハ善根な」けれハとて念佛往生をうたかふへからす又念」佛すれとも心の猛利ならさる事ハ末世の凡」夫のなれるくせ也その心のうちに又彌陀を」たのむ心のなきにしもあらすたとへハ主君」の恩をおもくする心ハあれとも宮仕する時」いさ、かものうき事の

善根なければとて念仏往生を疑うべからず

猛利の心なければとて往生を疑うべからず

あるかことし物う［四・ウ］しといへとも恩をしる心のなきにハあらさ」るかことし念佛にたにも猛利ならすハい」つれの行にか猛利ならんいつれも猛利」ならされハなれとも一生むなしくすきは」そのおハりいかんたとひ猛利ならさるに、」たれともこれを修せんとおもふ心あるハ心さし」のしるしなるへしこのめハおのつから發［五・オ］心すといふ事あり功をつミ德をかさぬれハ」時々猛利の心もいてくる也はしめよりその」心なけれハとてむなしくすきハ生涯いた」つらにくれなん事後悔さきにたつへか」らすなかんつくに善導の御義にハ散動」の機をえらはさる也しかれハ猛利の心な」けれハとて往生をうたかふへからす又世間［五・ウ］のいとなミひまなけれハこそ念佛の行をハ」修すへけれそのゆへハ男女貴賤行住坐臥」をえらはす時處諸緣を論せすこれを修」するにかたしとせす乃至臨終にもその便」宜をえたる事念佛にハしかすといへり餘」の行ハま事に世間怱々の中にしてハ修し」かたし念佛の行にかきりてハ在家出家を［六・オ］えらはす有智無智をいはす稱念するにた」よりあり世間の事にさへられて念佛往生」をとけさるへからすた、し詮するところ無」道心のいたすところ也されハとて世間をもす」てさるものゆへ世間には、かりて念佛せすは」わか身にたのむところなく心のうちにつの」るところなしうけかたき人身をうけあひ［六・ウ］かたき佛法にあへり無常念々にいたり老少」きハめて不定なり

世間の営み暇なければこそ念仏の行をば修すべけれ

うけがたき人身をうけあいがたき仏法にあえり

三心
至誠心
深心
廻向発願心
一向専念

やまひきたらん事かねて」しらす生死のちかつく事たれかおほへ」んもともいそくへしはけむへし念佛に」三心を具すといへるもこれらのことハりをは」いてす三心といハ一にハ至誠心二にハ深心三にハ」廻向發願心なり至誠心といハ眞實の心なり［七・オ］往生をねかひ念佛を修せんにも心のそこ」よりおもひたちて行するを至誠心といふ心」におもはさる事を外相はかりにあらはすを」虚假不實といふ也心のうちに又ふたゝひ生死」の三界に返らしとおもひ心のうちに淨土」にむまれんとおもひて念佛すれハ往生す」へしこのゆへにハその相も見へさるか往生する［七・ウ］事ありほかにその相ミゆれとも往生せさる」もありたゝ心につら〳〵有爲無常のありさ」まをおもひしりてこの身をいとひ念佛を」修すれハ自然に至誠心をハ具する也深心といハ」信心也わか身ハ罪惡生死の凡夫也と信し」彌陀如來ハ本願をもてかならす衆生を引」接し給ふと信してうたかはす念佛せん［八・オ］物むまれすハ正覺をとらしとちかひてす」てに正覺をなり給へハ稱念のものかならす」往生すと信すれハ自然に深心をハ具する也」廻向發願心といふハ修するところの善根を」極樂に廻向してかしこに生せんとねかふ」心也別の義あるへからす三心といへる名は」各別なるに、たれとも詮するところハたゝ［八・ウ］一向專念といへる事あり一すちに彌陀をた」のミ念佛を修して餘の事をましへさる」也そのゆへハ壽命の長短といひ果報の

深淺と」いひ宿業にこたへたる事をしらすして」いたつらに佛神にいのらんよりも一すちに彌」陀をたのミてふた心なけれハ不定業をハ彌」陀も轉し給へり決定業をハ來迎し給ふ［九・オ］へし無益のこの世をいのらんとて大事の後世」をわする、事ハさらに本意にあらす後生」のために念佛を正定の業とすれハこれをさ」しをきて餘の行を修すへきにあらされ」は一向專念なれとハす、むる也た、し念佛」して往生するに不足なしといひて惡業」をもは、からす行すへき慈悲をも行せす［九・ウ］念佛をもはけまさらん事ハ佛敎のおきて」に相違する也たとへハ父母の慈悲ハよき子を」もあしき子をもはく、めともよき子をハ」よろこひあしきをはなけくかことし佛」ハ一切衆生をあはれミてよきをもあしき」をもわたし給へとも善人を見てハよろこ」ひ惡人を見てハかなしミ給へる也よき地に［一〇・オ］よき種をまかんかことしかまへて善人にし」てしかも念佛をも修すへしこれを眞實」に佛敎にしたかふ物といふ也詮するところつ」ねに念佛して往生に心をかけて佛の引接」を期してやまひにふし死におよふへからん」におとろく心なく往生をのそむへき也」

南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛」

かまえて善人にしてしかも念仏をも修すべし

釈迦一代の聖教をみな浄土宗に収む

念仏は本願

三心具足の念仏者は決定往生す

智具の三心

［一〇・ウ］

∴東大寺十問答」第二　俊乗房問」

一問釈迦一代の聖教をミな浄土宗におさ」め候か又三部経にかきり候か」

答八宗九宗ミないつれをもわか宗の中に一」代をおさめて聖道浄土の二門とハわかつ也」聖道門に大小あり権實あり浄土門に十方」あり西方あり西方門に雑行あり正行あり［一一・オ］正行に助行あり正定業ありかくして聖道」ハかたし浄土ハやすしと釋しいる、也宗を」たつるおもむきもしらぬもの、三部經」にかきるとはいふなり」

二問正雑二行ともに本願にて候か」

答念佛ハ本願也十方三世の佛菩薩にすて」られたるゑせ物をたすけんとて五劫まて［一一・ウ］思惟し六道の苦にゆつりこれをたよりにて」すくはんと支度し給へる本願の名號也」ゆめ〳〵雑行本願といふ物ハ佛の五智を」うたかひて邊地にとゝまる也見佛聞法の」利益にしハ〳〵もるゝ物也これハ誑惑のもの」の道心もなきか山寺法師なんとにほめら」れんとて佛意をハかへりみついひいたせる［一二・オ］事なり」

三問三心具足の念佛者ハ決定往生歟」

答決定往生する也三心に智具の三心あり行」具の三心あり智具の三心といふハ諸宗

行具の三心

修學」の人本宗の智をもて信をとりかたきを經」論の明文を出し解釋のおもむきを談し」て念佛の信をとらしめんとてとき給へる也［一二・ウ］行具の三心といふは一向に歸すれハ至誠心也」疑心なきハ深心也往生せんとおもふハ廻向心」也かるかゆへに一向念佛してうたかふおもひ」なく往生せんとおもふハ行具の三心也五念」四修も一向に信する物にハ自然に具する也」

念仏は必ず念珠をもつべきなり

四問念佛ハかならす念珠をもたすともくる」しかるましく候か

［一三・オ］

答かならす念珠をもつへき也世間のうたを」うたひ舞をまふそらその拍子にしたか」ふ也念珠をはかせにて舌と手とをうこか」す也たゝし無明を斷せさらんものハ妄念」おこるへし世間の客と主とのことし念珠」を手にとる時ハ妄念のかすをとらんとハ約束せ」す念佛のかすとらんとて念佛のあるしを［一三・ウ］すゑつるうゑは念佛ハ主妄念ハ客人也され」ハとて心の妄念をゆるされたるハ過分の恩也」それにあまさへ口に様々の雜言をして念」珠をくりこしなんとする事ゆゝしきひ」か事なり」

三宝

五問この大佛かくあふきまいらせて候ハこの」大佛の御ハからひにて淨土にもおくりつけ［一四・オ］させ給ふへく候か」

一体の三宝

答この事沙汰のほかの事也三寶をたつる」に三あり一に一體三寶といふハ法身の理

別相の三宝
住持の三宝

の」うゑに三寶の名をたつる也萬法ミな法身よ」り出生するかゆへ也二に別相三寶といふハ十方」の諸佛ハ佛寶也その智慧およひ所説の經」教ハ法寶也三乘の弟子ハ僧寶也もし大［一四・ウ］佛むかへ給ハ、三寶の次第もみたるへし」そのゆへハ畫像木像ハ住持の佛寶也かきつ」けたる經巻ハ法寶也畫像木像の三乘ハ」僧寶也住持と別相ともとも分別せらるへ」しなかんつくに本尊ハ娑婆にと、まりて」行者ハ西方にさらん事存のほかの事也」た、し淨土の佛のゆかしさにそのかたち［一五・オ］□つくりて眞佛の思をなすハ功□□德をうる事也」

道心の有無と念仏

六問有智の人のよのつねならんと無智」の人のほかに道心ありと見へ候はんといつれにてか候へき」

答小智のもの、道心なからんハ無智の人の」道心あらんにハ千重萬重のおとり也かるか」ゆへに無智の人の念佛ハ本願なれハ往生す［一五・ウ］へし小智のもの、道心なからんハあるいハ不」淨説法あるいは虚説人師にあり決定地」獄におつへした、し無智の人の道心ハひか」事をま事とおもひておそるましき事を」□おそれおそるへき事をハおそれぬ也大智」の人の道心なからんハ道をしりてやすく」ゆく人也盲□目の人を明眼の人にたとへん事［一六・オ］あさましき事也道心おなし事ならハ」小智のものハなを無智の人に萬億倍すく」へき也無智の人の道心ハわひてかてらの事也」

念仏者は必ず摂取の益に預かる

七問念佛申人ハかならす攝取の益にあつ」かり候か」

答しかなり」

摂取の光明

八問攝取の光明ハ一度てらしてハいつも不［一六・ウ］退なると申人の候ハ一定にて候か」

答この事おほきなるひか事也念佛のゆ」へにこそてらすひかりの念佛退轉して」のちハなにものをたよりにて、らすへき」そさやうにあるならハ念佛一遍申さぬ」ものやハあるされとも往生するものハすく」なくせさるものハおほき事現證たれか［一七・オ］うたかはん」

本願の十念と願成就の一念

九問本願にハ十念成就にハ一念と候ハ平生に」て候か臨終にて候か」

答去年申候き聖道にハさやうに一行を平」生にしつれハ罪卽時に滅してのちに又」相續せされとも成佛すといふ事ありそ」れハなを緣をむすハしめんとて佛の方便［一七・ウ］してとき給へる事也順次の義にハあらす」華嚴禪門眞言止觀なんとの至極甚深」の法門こそさる事ハあれこれハ衆生も」とより懈怠のものなれハ疑惑のもの一度」申をきてのち申さすとも往生するおも」ひに住して數遍を退轉せん事ハくち」おしかるへし十念ハ上盡一形に對する時［一八・オ］の事也おそく念佛にあひたらん人ハいの」ちつ、まりて百念にもおよはぬ十念十」念にもおよはぬ一念也この源空

念仏往生の人は報仏の来迎に預かる

ある人への御返事―弥陀の誓いを憑みて決定往生の道に赴けかし

かころもを」やきすて、こそ麻のゆかりを滅したる」にてハあらめこれかあらんかきりハ麻の滅」したるにてハなき事也過去無始よりこ」のかた罪業をもて成せる身もものとのこと［一八・ウ］し心ももとの心ならハなにをか業成し」罪滅するしるしとすへき罪滅する物ハ」無生をう無生をうる物ハ金色のはたへと」なる彌陀の願に金色となさんとちかはせ」給へとも念佛申人たれか臨終以前に金」色となるた、ものさかしからて一發心已」後無有退轉の釋をあふひて臨終をま［一九・オ］つへき也」

十問臨終 來迎ハ報佛にておハしまし候か」

答念佛往生の人は報佛の迎にあつかる雜行」の人々の往生するハかならす化佛の來迎に」て候也念佛もあるいハ餘行をましへあるいハ」疑心をいさ、かもましふる物ハ化佛の來迎」を見て佛をかくしたてまつるもの也

［一九・ウ］

建久二年三月十三日東大寺聖人奉　問」空上人一御答也」

∴御消息第三」

御文こまかにうけ給ハり候ぬかやうに申候」事の一分の御さとりをもそへ往生の御心」さしもつよくなり候ひぬへからんにハお」それをもは、かりをもかへりみるへき

にて［二〇・オ］候はすいくたひも申たくこそ候へま事に」わか身のいやしくわか心のつたなきをハかへ」りみ候はすたれ〳〵もミな人の彌陀のちか」ひをたのミて決定往生のみちにおもむけか」しとこそおもひ候へとも人の心さま〳〵に」してた、一すちにゆめまほろしのうき」世ハかりのたのしミさかへをもとめてすへ［二〇・ウ］てのちの世をもしらぬ人も候又後世をお」そるへきことハりをおもひしりてつとめ」おこなふ人につきてもかれこれに心をう」こかして一すちに一行をたのまぬ人も候」又いつれの行にてももとよりしはしめ」おもひそめつる事をハいかなることハりを」きけとももとの執心をあらためぬ人も候［二一・オ］又けふハいミしく信をおこして一すちにお」もむきぬと見ゆる程にうちすつる人も候」かくのミ候てま事しく浄土の一門にいり」て念佛の一行をもはらにする人のあり」かたく候事ハわか身ひとつのなけきとこ」そハ人しれすおもひ候へとも法によりて」人によらぬことハりをうしなハぬ程の人も［二一・ウ］ありかたき世にて候おのつからす、め心み」候にもわれからのあなつらハしさに申」いつることハりすてらる、にこそなんとお」もひしらる、事にてのミ候か心うくか」なしく候てこれゆへハいまひときハとく〳〵」浄土にむまれてさとりをひらきてのち」いそきこの世界に返りきたりて神通方［二二・オ］便をもて結縁の人をも無縁のものをも」ほむるをもそしるをもミなこと〳〵く

浄土門につきて行なうべき様
―安心起行
三心―『観経』

善導大師の釈
―至誠心

浄土へむかへとらんとちかひをおこしてのミ」こそ當時の心をもなくさむる事にて」候にこのおほせこそわか心さしもしるし」ある心ちしてあまりにうれしく候へその」義にて候ハ、おなしくハまめやかにけに〳〵［二二・ウ］しく御沙汰候ひてゆくする𡚁もあやうか」らす往生もたのもしき程におほしめし」さためさせおハしますへく候詮してハ人」のはからひ申すへき事にても候ハすよ」く〳〵案して御らん候へこの事にすきた」る御大事何事かハ候へきこの世の名聞利養」ハ中〳〵に申ならふるもいま〳〵しく候［二三・オ］やかて昨日今日まなこにさへきりみ、にミち」たるはかなさにて候めれハ事あたらしく」申たつるにおよはすた、返〳〵も御心をし」つめておほしめしはからふへく候さき」にハ聖道浄土の二門を心えわきて浄土の」一門にいらせおハしますへきよしを申候き」いまハ浄土門につきておこなふへき様を［二三・ウ］申候へし」

浄土に往生せんとおもはん人ハ安心起行と」申て心と行との相應すへき也その心といふハ」觀無量壽經に釋していはくもし衆生あ」りてかのくに、むまれんとねかはんものハ」三種の心をおこしてすなハち往生すへしな」にをか三つとする一にハ至誠心二にハ深心三に［二四・オ］ハ迴向發願心也三心を具せるものかならす」かのくに、むまるといへり善導和尚この三心」を釋していはく一に至誠心といハ至といハ

眞」也誠といハ實也一切衆生の身口意業に修せ」んところの解行かならす眞實心の中にな」すへき事をあらはさんとおもふほかにハ賢」善精 進の相を現してうちにハ虚假をなす［二四・ウ］事なかれ内外明 暗をえらはすかならす眞」實をもちゐよかるかゆへに至誠 心となつく」といへりこの釋の心ハ至誠 心といふハ眞實の心」也その眞實といふハ身にふるまひ口にいひ心に」おもはん事ミなま事の心を具すへき也」すなハちうちハむなしくしてほかをかさる」心のなきをいふこの心ハうき世をそむきて［二五・オ］ま事のミちにおもむくとおほしき人〳〵」の中によく〳〵用意すへき心はへにて候也」われも人もいふハかりなきゆめの世を執す」る心のふかゝりしなこりにてほと〳〵につ」けて名 聞利養をわつかにふりすてたる」はかりをありかたくいミしき事にして」やかてそれを返りて又名 聞にしなして［二五・ウ］この世さまにも心のたけのうるせきにとりな」してさとりあさき世間の人の心の中を」はしらす貴かりいミしかるをこれこそハ」本意なれしえたる心ちしてミやこのほと」りをかきはなれてかすかなるすミかを」たつぬるまても心のしつまらんため」をハつきにして本尊道場の荘 厳やま［二六・オ］かきのうちにハ木立なんとの心ほそくもあ」はれならんことからを人に見へきかれん事」をのミ執する程につゆの事も人のそしり」にならん事あらしといとなむ心よりほか」におもひさす事もなきやうなる心ちの」ミして

内外相応—四句の分別

善導大師の釈—深心

佛のちかひをたのミ往生をねかハ」んなんといふ事をハおもひいれす沙汰も［二六・ウ］せぬ事のやかて至誠心かけて往生もえせぬ」心はへにて候也又かく申候へハ一つにこの世の」人目をハいかにもありなんとて人のそしり」をかへりみぬかよきそと申へきにてハ候ハ」すたゝし時にのそみたる譏嫌のために」世間の人目をかへりみる事ハ候ともそれを」のミおもひいれて往生のさわりになるか□［二七・オ］をハかへりみぬ様にひきなされ候はん事の」返〳〵もおろかにくちおしく候へハ御身にあ」たりても御心えさせまいらせ候ハんために申」候也この心につきて四句の不同あるへし」一にハ外相ハ貴けにて内心ハ貴からぬ人あり」二にハ外相も内心もともに貴からぬ人あり」三にハ外相ハ貴けもなくて内心貴き人あり［二七・ウ］四にハ外相も内心もともに貴き人あり四人か」中にハさきの二人ハいまきらふところの至誠心」かけたる人也これを虚假の人となつくへし」のちの二人ハ至誠心具したる人也これを眞」實の行者となつくへしされハ詮するとこ」ろはた、内心にま事の心をおこして外」相ハよくもあれあしくもあれとてもかく［二八・オ］てもあるへきにやとおほへ候也おほかたこの世」をいとはん事も極樂をねかはん事も人」目ハかりをおもはてまことの心をおこすへき」にて候也これを至誠心と申候也」

二に深〳〵心といふハ善導釋し給ひていはくこ」れに二種あり一にハ決定してわか身はこ

れ」煩悩を具せる罪悪生死の凡夫也善根う［二八・ウ］すくすくなくして曠劫よりこのかたつね」に三界に流転して出離の縁なしと信す」へし二にハかの阿彌陀佛四十八願をもて」衆生を攝取し給ふすなハち名號を稱」する事下十聲一聲にいたるまてかの願」力に乗してさためて往生する事をうと」信して乃至一念もうたかふ心なきゆ□に［二九・オ］深心となつく又深信といふハ決定して心を」たて、佛教にしたかひて修行してなか」くうたかひをのそき一切の別解別行異」學異見異執のために退動傾動せられさ」る也といへりこの釋の心ハはしめにハわか身の」程を信しのちにハほとけの願を信する」也た、しのちの信を決定せんかためにはし［二九・ウ］めの信心をハあくる也そのゆへハもしはし」めの信心をあけすしてのちの信心を出し」たらましかハもろ〳〵の往生をねかはん人」たとひ本願の名號をハとなふともみつから」心に貪欲瞋恚等の煩悩をもおこし身」に十惡破戒等の罪惡をもつくりたる事」あらはミたりに自ら身をひかめて返て本［三〇・オ］願をうたかひ候ひなましいまこの本願に」十聲一聲までに往生すといふハおほろけ」の人にハあらし妄念もおこらす罪もつく」らすめてたき人にてそあるらんわかことき」のともからの一念十念にてハよもあらし」とそおほへまししかるを善導和尚未來の」衆生のこのうたかひをのこさん事をか、ミて［三〇・ウ］この二種の信心をあけてわれらかこときいま」た煩悩を

も斷せす罪をもつくれる凡夫な」りともふかく彌陀の本願を信して念佛」すれハ一聲にいたるまて決定して往生す」るむねを釋し給へりこの釋のことに心に」そミていみしくおほへ候也ま事にかくたに」も釋し給ハさらましかハわれらか往［三二・オ］生ハ不定にそおほへましとあやうくおほ」へ候てされハこの義を心えわかぬ人やらんわか」心のわろけれハ往生ハかなハしなんとこそは」申あひて候めれそのうたかひのやかて往」生せぬ心にて候けるものをたゝ心のよき」わろきをも返りみす罪のかろきおもき」をも沙汰せす心に往生せんとおもひて［三二・ウ］口に南無阿彌陀佛ととなへハ聲につきて」決定往生のおもひをなすへしその決定」の心によりてすなハち往生の業ハさたま」る也かく心うれハうたかひもなし不定と」おもへハやかて不定也一定とおもへハ一定する」事にて候也されハ詮してハふかく信する」心と申候ハ南無阿彌陀佛と申せハその佛［三二・オ］のちかひにていかなるとかをもきらはす」一定むかへ給ふそとふかくたのミてうたか」ふ心のすこしもなきを申候けるに候又別」解別行にやふられされと申候ハさとり」ことに行ことならん人のいはん事について」念佛をもすて往生をもうたかふ事なか」れと申候也さとりことなる人と申ハ天台［三二・ウ］法相等の八宗の學生これ也行ことなる人と」申すハ眞言止觀等の一切の行者これ也こ」れらハミな聖道門の解行也淨土門の解行」にことなるかゆへに別

声につきて決定往生のおもいをなす

別解別行に破られざれ

一切の仏は同心に衆生を導く

弥陀の願成就

釈迦の説法

諸仏の証誠

解別行となつくる」也あらぬさとりの人にいひやふらるまし」き事ハりをハ善導こまかに釋し給ひて」候へともその文ひろくしてつふさにひく［三三・オ］におよはす心をとりて申さハたとひ佛き」たりてひかりをはなちしたをいたして」煩悩罪悪の凡夫の念佛して一定往生」すといふ事ハひか事そ信すへからすとの給」ともそれにより て一念もうたかふ心あるへ」からすそのゆへハ一切の佛ハミなおなし心」に衆生をハ みちひき給ふ也すなハちまつ［三三・ウ］阿彌陀如來願をおこしていはくもしわれ」佛になりたらんに十方の衆生わかくに、む」まれんとねかひて名號をとなふる事下十」聲一聲にいたらんにわか願力に乘して」もしむまれすんハ正覺をとらしとちかひ」給てその願成就してすてに佛になり」給へりしかるを釋迦ほとけこの世界にい［三四・オ］て、衆生のためにかの佛の本願をとき給へ」り又六方におの〳〵恆河沙數の諸佛ま」し〳〵て口々に舌をのへて三千世界におほ」ふて無虚妄の相を現して釋迦佛の彌」陀の本願をほめて一切衆生をす、めてか」の佛の名號をとなふれハさためて往生すと」とき給へるハ決定してうたかひなき事也［三四・ウ］一切衆生ミなこの事を信すへしと證誠し」給へりかくのことき一切の諸佛一佛ものこ」らす同心に一切凡夫念佛して決定して」往生すへきむねをあるいハ願をたてあるいハ」その願をときあるいハその說を證してす、」め給へるうゑにハいかなる佛の又きたりて」往生

善導大師の釈
―廻向発願心

釈のこころ―廻
向発願心

すへからすとはの給へきそといふことわり［三五・オ］の候そかしこのゆへに佛きたりての給」ともおとろくへからすとハ申候也佛なを」しかりいはんや聲聞縁覺をやいかにいは」んや凡夫をやと心えつれハ一とたひもこの」念佛往生の法門をき、ひらきて信をお」こしてんのちハいかなる人とかく申ともな」かくうたかふ心あるへからすとこそおほへ候へ［三五・ウ］これを深心と申候也」

三に廻向發願心といふハ善導釋していハく」過去及今生の身口意業に修するところの」世出世の善根および他の一切の凡聖の身」口意業に修せんところの世出世の善根を」隨喜してこの自他所修の善根をもてこ」と〳〵くミな眞實深信の心の中に廻向し［三六・オ］てかのくに、むまれんとねかふ也又廻向發願」心といふハかならす決定眞實の心の中に廻」向してむまる、事をうるおもひをなせ」この心ふかく信してなをし金剛のことく」して一切の異見異學別解別行の人のた」めに動亂破壞せられされといへりこの釋の」心はまつわか身につきてさきの世およひ［三六・ウ］この世に身にも口にも心にもつくりたらん」功德ミなこと〳〵く極樂に廻向して往生」をねかふ也つきにハわか身の功德のミなら」すこと人のなしたらん功德をも佛菩薩」のつくらせ給ひたらん功德をも隨喜す」れハミなわか功德となるをもてこと〳〵く」極樂に廻向して往生をねかふ也すへてわか［三七・オ］身の事にても人の事にてもこの世の

往生を願わん人は最もこの三心を具すべきなり

果」報をもいのりおなしくのちの世の事なれ」とも極樂ならぬ餘の淨土にむまれんとも」もしハ都繁にむまれんとももしハ人中天」上にむまれんともたとひかくのことくかれ」にてもこれにてもこと事に迴向する事」なくして一向に極樂に往生せんと迴向［三七・ウ］すへき也もしこの事ハりをもおもひさため」さらんさきにこの世の事をもいのりあらぬ」かたへも迴向したらん功德をもミなとり」返して往生の業になさんと迴向すへき也」一切の善根をミな極樂に迴向すへしと申」せはとて念佛に歸して一向に念佛申さん」人のことさらに餘の功德をつくりあつめて［三八・オ］迴向せよとにハ候はすた、すきぬるかたに」つくりおきたらん功德をもし又この、ち」なりともおのつから便宜にしたかひて念」佛のほかの善を修する事のあらんをもし」かしなから往生の業に迴向すへしと申す」事にて候也この心金剛のことくにして別」解別行にやふられされと申候ハさきにも［三八・ウ］申候つる樣にことさとりの人におしへられ」てかれこれに迴向する事なかれと申候心」也金剛ハやふれぬものにて候なれハたとへに」とりてこの心のやふられぬ事も金剛のこと」くなれと申候にやとおほへ候これを迴向發」願心とハ申候也三心のありさまおろ〳〵申」ひらき候ぬこの三心を具してかならす往［三九・オ］生す一の心もかけぬれハむまる、事をえ」すと善導は釋し給ひたれハ往生をねか」はん人ハ最もこの三心を具すへき也しかる」にかや

うに申したるにハ別々にて事〳〵しき」やうなれとも心えとくにハさすかにやすく具」しぬへき心にて候也詮してハた、ま事」の心ありてふかく佛のちかひをたのミて［三九・ウ］往生をねかはんするにて候そかしされハ」あさくふかくのかハりめこそ候へともさほ」との心ハなにかおこさ、らんとこそハおほへ候へ」かやうの事ハうとくおもふおりにハ大事にお」ほへ候とりよりて沙汰すれハさすかにやす」き事にて候也よく〳〵心えとかせおハしま」すへく候た、しこの三心はその名をたに［四〇・オ］もしらぬ人もそらに具して往生し又」こまかにならひ沙汰する人も返りて闕る」事も候也これにつきても四句の不同候へ」しさハ候へとも又これを心えてわか心にハ三」心具したりとおほへハ心つよくもおほへ」又具せすとおほへハ心をもはけましてかま」えて具せんとおもひしり候はんハよくこ［四〇・ウ］そハ候ひぬへけれハ心のおよふ程ハ申候に候」このうゑさのミはつくしかたく候へハと、め」候ぬ又この中におほつかなくおほしめす」事候はんをハおのつから見参にいり候ハん時」申ひらくへく候これそ往生すへき心はへ」の沙汰にて候これを安心とハなつけて候也」

わたくしにいはく浄土門に入へき御消息［四一・オ］ありけりと見えたりいまたつねえす」

ある人のもとへつかハす御消息」

本願を疑うばかりこそ、往生には大きなる障り

後生の往生は念仏のほかには叶うまじくそうろう

念佛往生ハいかにもしてさハりを出し」難せんとすれとも往生すましき道理ハ」おほかた候はぬ也善根すくなしといはんと」すれハ一念十念もるゝ事なし罪障おも」しといはんとすれハ十惡五逆も往生をと［四一・ウ］く人をきらはんといはんとすれハ常沒流」轉の凡夫をまさしきうつハ物とせり時く」たれりといはんとすれハ末法萬年のする」法滅已後さかりなるへしこの法ハいかに」きらはんとすれとももるゝ事なしたゝ」ちからおよはさる事ハ惡人をも時をも」えらはす攝取し給ふ佛なりとふかくた［四二・オ］のミてわか身をかへりみすひとすちに佛の」大願業力によりて善惡の凡夫往生をうと」信せすして本願をうたかふハかりこそ往」生にハおほきなるさハりにて候へ」

一いかさまにも候へ末代の衆生ハ今生のいの」りにもなりまして後生の往生ハ念佛の」ほかにハかなふましく候源空かわたくしに［四二・ウ］申す事にてハあらす聖教のおもてにかゝみ」をかけたる事にて候へハ御らんあるへく候也」

熊谷の入道へつかはす御返事」

御文よろこひてうけ給ハり候ぬまことに」その、ちおほつかなく候つるにうれしくお」ほせられて候たんねんふつの文かきてまい」らせ候御らん候へし念佛の行ハかの佛の［四三・オ］本願の行にて候持戒誦經誦咒理觀等の」行ハかの佛の本願にあ

但念仏が決定往生の業

善導和尚は阿弥陀仏の化身

善根は念仏の暇あらばのことにそうろう

らぬおこなひにて」候へハ極樂をねかはん人ハまつかならす本」願の念佛の行をつとめてのうゑにもし」ことおこなひをも念佛にしくわへ候ハんと」おもひ候ハ、さもつかまつり候又た、本」願の念佛ハかりにても候へし念佛をつか［四三・ウ］まつり候ハてた、ことおこなひハかりをし」て極樂をねかひ候人ハ極樂へもえむまれ」候はぬ事にて候よし善導和尚のおほ」せられて候へハ但念佛か決定往生の業」にてハ候也善導和尚ハ阿彌陀の化身に」ておハしまし候へハそれこそハ一定に」て候へと申候に候又女犯と候ハ不婬戒の［四四・オ］事にこそ候なれ又御きうたちとものか」んたうと候ハ不瞋戒のことにこそ候なれ」されハ持戒の行ハ佛の本願にあらぬ行」なれハたへたらんにしたかひてたもたせ」給へく候けうやうの行も佛の本願に」あらすたへんにしたかひてつとめさせ」おハしますへく候又あか、ねの阿字の事［四四・ウ］もおなしことに候又さくちやうの事も」佛の本願にあらぬつとめにて候とても」かくても候なん又かうせうのまんたらハ」たいせちにおハしまし候それもつきの」事に候た、念佛を三萬もしハ五萬も」しハ六萬一心に申させおハしまし候」はんそ決定往生のおこなひにてハ候こ［四五・オ］と善根ハ念佛のいとまあらハの事に候」六萬遍をたに申させ給ハ、そのほかにハ」なに事をかハせさせおハしますへき」まめやかに一心に三萬五萬念佛をつと」めさせ給ハ、せう〳〵戒行やふれさせおハ」しまし候とも往

熊谷入道の孝養の行

生ハそれにハより候」ましきことに候たゝしこのなかにけう［四五・ウ］やうの行ハ佛の本願の行にてハ候ハね」とも八十九にておハしまし候なりあ」ひかまへてことしなんとをハまちまいら」せさせおハしませかしとおほへ候あな」かしこ〳〵」

五月二日　　源空　御自筆也」

ある時の御返事

［四六・オ］

死期知って往生する人

およそこの条こそと□く申におよひ候ハ」すめてたく候へ往生をせさせ給ひたらん」にはすくれておほへ候死期しりて往生」する人〳〵ハ入道とのにかきらすおほく候」かやうに耳目おとろかす事ハ末代には」よも候ハしむかしも道綽禪師はか」りこそおハしまし候へ返〳〵申ハかり［四六・ウ］なく候たゝしなに事につけても佛道」にハ魔事と申す事のゆゝしき大事」にて候なりよく〳〵御用心候へきなり」かやうに不思議をしめすにつけても」たよりをうかゝふ事も候ひぬへきなりめ」てたく候にしたかひていたハしくおほ」えさせ給てかやうに申候なりよく〳〵［四七・オ］御つゝしミ候てほとけにもいのりまいらせ」させ給ふへく候いつか御のほり候へきかま」えて〳〵のほらせおハしませかし京の」人〳〵おほやうハミな信して念佛をもいま」すこしいさみあひて候これにつけても」いよ〳〵す、ませ給ふへく候あしさまにおほ」し

めすへからす候なを〳〵めてたく候あな［四七・ウ］かしこ〳〵」

四月三日　　源空」

熊谷入道殿へ」

わたくしにいはくこれハ熊谷入道念佛し」てやう〳〵の現瑞を感したりけるを上」人へ申あけたりける時の御返事なり」

∴往生浄土用心　第四」

道光の註記

多く念仏申せば上品に生まる

宿善と往生

［四八・オ］

一毎日御所作六萬遍めてたく候うたかい」の心たにも候はねハ十念一念も往生は」し候へともおほく申候へハ上品にむまれ候」釋にも上品花臺見慈主到者皆因念佛」多と候へは」

一宿善によりて往生すへしと人の申候」らんひか事にてハ候はすかりそめのこの

［四八・ウ］世の果報たにもさきの世の罪功德によ」りてよくもあしくもむまる、事にて」候へハまして往生程の大事かならす」宿善によるへしと聖教にも候やらんた、し」念佛往生ハ宿善のなきにもより候はぬや」らん父母をころし佛身よりちをあやし」たるほとの罪人も臨終に十念申て往生［四九・オ］すと觀經にも見えて候

弥陀の願力に乗りなば安楽国に生まるべし

凡夫

しかるに宿善あつ」き善人ハおしへ候はねとも惡におそれ佛道」に心す、む事にて候へハ五逆なんとハいかにも」いかにもつくるましき事にて候也それに」五逆の罪人念佛十念にて往生をとけ候時」に宿善のなきにもより候ましく候されハ」經に若人造多罪得聞六字名火車自然去［四九・ウ］花臺即來迎極重惡人無他方便唯稱念」佛得生極樂若有重業障無生淨土因乘」彌陀願力必生安樂國この文の心もし五」逆をつくれりとも彌陀の六字の名をき」かは火の車自然にさりて蓮臺きたりて」むかふへし又きハめておもき罪人の他の」方便なからんも彌陀をとなへたてまつらは［五〇・オ］極樂にむまるへし又もしおもきさハりあ」りて淨土にむまるへき因なくとも彌陀の」願力にのりなハ安樂國にむまるへしと候へ」ハたのもしく候又善導の釋にハ曠劫より」このかた六道に輪廻して出離の縁なか」らん常沒の衆生をむかへんかために阿彌」陀ほとけハ佛になり給へりと候その常沒［五〇・ウ］の衆生と申候ハ恆河のそこにしつみたるいき」物の身おほきになかくしてその河にはゝか」りてえはたらかすつねにしつみたるに」惡世の凡夫をハたとへられて候又凡夫と申二」の文字をハ狂酔のことしと弘法大師釋し」給へりけにも凡夫の心ハ物くるひさけにゑい」たるかことくして善惡につけておもひさた［五一・オ］めたる事なし一時に煩惱百たひましハ」りて善惡みたれやすけれハいつれの行」なりともわかちからにてハ

法蔵菩薩

三字の名字

他力―仏法不思議の用力

行しかたし」しかるに生死をはなれ佛道にいるにハ菩提心をおこし煩悩をつくして三祇百劫難行苦行してこそ佛にハなるへきに」て候に五濁の凡夫わかちからにてハ願行［五一・ウ］そなハる事かなひかたくて六道四生に」めくり候也彌陀如來この事をかなしミ」おほして法藏菩薩と申し、いにしへ我」等か行しかたき僧祇の苦行を兆載永劫」かあひた功をつミ徳をかさねて阿彌陀」ほとけになり給へり一佛にそなへ給へる四」智三身十力無畏等の一切の内證の功徳相［五二・オ］好光明説法利生等の外用の功徳さま〳〵」なるを三字の名字のなかにおさめいれて」この名號を十聲一聲まてもとなへん物」をかならすむかへんもしむかへすハわれ佛」にならしとちかひ給へるにかの佛いま現」に世にまし〳〵て佛になり給へり名號を」となへん衆生往生うたかふへからすと善導［五二・ウ］もおほせられて候也この様をふかく信し」て念佛おこたらす申て往生うたかはぬ」人を他力信したるとハ申候也世間の事」にも他力ハ候そかしあしなえこしゐ」たる物の、とをきみちをあゆまんとおも」はんにかなはねハ船車にのりてやすくゆ」く事これわかちからにあらす乘物のち［五三・オ］からなれハ他力也あさましき惡世の凡」夫の諂曲の心にてかまへつくりたるのり物」にたにか、る他力ありまして五劫のあひ」たおほしめしさためたる本願他力の」ふねいかたに乘なハ生死の海をわたらん事」うたかひおほしめすへから

すしかのミ」ならすやまひをいやす草木くろかねを［五三・ウ］とる磁石不思議の用力也又麝香ハかうハし」き用ありさいの角ハミつをよせぬちからあ」りこれミな心なき草木ちかひをおこさぬ」けた物なれとももとより不思議の用力ハ」かくのミこそ候へまして佛法不思議の用」力ましまさ、らんやされは念佛ハ一聲に」八十億劫のつミを滅する用あり彌陀ハ［五四・オ］惡業深重の物を來迎し給ふちからまし」ますとおほしめしとりて宿善のあり」なしも沙汰せすつミのふかきあさきも」返りミすた、名號となふるもの、往生す」るそと信しおほしめすへく候すへて破戒」も持戒も貧窮も福人も上下の人をきらハす」た、わか名號をたに念せハいしかわらを變し［五四・ウ］て金となさんかことし來迎せんと御約束」候也法照禪師の五會法事讃にも」

彼佛因中立弘誓　聞名念我惣來迎」
不簡貧窮將冨貴　不簡下智與高才」
不簡多聞持淨戒　不簡破戒罪根深」
但使迴心多念佛　能令瓦礫變成金」

た、御す、をくらせおハしまして御舌を［五五・オ］たにもはたらかされす候はんハけたいにて候へ」した、し善導の三縁の中の親縁を釋」し給ふに衆生ほとけを禮すれ

ハ佛これを」見給ふ衆生佛をとなふれハ佛これをき、」給ふ衆生佛を念すれハ佛も衆生を念し」給ふかるかゆへに阿彌陀佛の三業と行者の」三業とかれこれひとつになりて佛も衆生も［五五・ウ］おや子のことくなるゆへに親縁となつくと」候めれハ御手にす、をもたせ給て候ハ、佛」これを御らん候へし御心に念佛申すそ」かしとおほしめし候ハ、佛も衆生を」念し給ふへしされハ佛に見えまいらせ念せ」られまいらする御身にてわたらせ給ハんす」る也さハ候へともつねに御したのはたらく［五六・オ］へきにて候也三業相應のためにて候へし」三業とハ身と口と意とを申候也しかも佛」の本願の稱名なるかゆへに聲を本體とハ」おほしめすへきにて候さてわかみ、にきこゆ」る程申候ハ高聲の念佛のうちにて候なり」高聲ハ大佛をおかみ念するハ佛のかすへもな」と申けに候いつれも往生の業にて候へく候

高声の念仏

［五六・ウ］

一御無言めてたく候た、し無言ならて申す」念佛ハ功德すくなしとおほしめされんハあ」しく候念佛をハ金にたとへたる事にて候金」は火にやくにもいろまさりミつにいる、にも」損せす候かやうに念佛ハ妄念のおこる時」申候へともけかれす物を申しまするにも」まきれ候はすそのよしを御心えなから御［五七・オ］念佛の程ハこと事ませすしていますこし」念佛のかすをそえんとおほしめさんハさんて」候もしおほしめ

無言の念仏

しわすれてふと物な」んとおほせ候てあなあさましいまハこの念」佛むなしくなりぬとおほしめす御事」ハゆめ〳〵候ましく候いかやうにて申候」とも往生の業にて候へく候

一念十念にて生まれる念仏と思う嬉しさに百萬遍の功徳を重ねる

［五七・ウ］

一百萬遍の事佛の願にてハ候はねとも小阿」彌陀經に若一日若二日乃至七日念佛申人」極樂に生するとハかゝれて候へハ七日念佛申」へきにて候その七日の程のかすハ百萬遍に」あたり候よし人師釋して候時に百萬遍」ハ七日申へきにて候へともたへ候ハさらん人ハ八」日九日なんとにも申され候へかしされハと［五八・オ］て百萬遍申さゝらん人のむまるましきに」てハ候はす一念十念にてもむまれ候也一」念十念にてもむまれ候ほとの念佛とおもひ」候うれしさに百萬遍の功徳をかさぬるにて」候也」

逆修はすべきこと

一七分全得の事仰のまゝに申けに候さて」こそ逆修ハする事にて候へさ候へハのちの［五八・ウ］世をとふらひぬへき人候はん人もそれをた」のますしてわれとはけミて念佛申して」いそき極樂へまいりて五通三明をさとりて」六道四生の衆生を利益し父母師長の生」所をたつねて心のまゝにむかへとらんとおもふ」へきにて候也又當時日ことの御念佛をも」かつ〳〵廻向しまいらせられ候へしなき［五九・オ］人のため

人のために念仏を廻向す

浄土の法門をきけどもきかざるがごとくなるは

に念佛を廻向し候へハ阿彌陀ほ」とけひかりをはなちて地獄餓鬼畜生を」てらし給ひ候へハこの三惡道にしつミて」苦をうくる物そのくるしミやすまりて」いのちおハりてのち解脱すへきにて候大」經にいはく若在三塗勤苦之處見此光明皆」得休息無復苦惱壽終之後皆蒙解脱

［五九・ウ］

一本願のうたかハしき事もなし極樂の」ねかハしからぬにてハなけれとも往生一定」とおもひやられてとくまいりたき心のあさ」ゆふハしミ〳〵ともおほえすとおほせ候事」ま事によからぬ御事にて候淨土の法門」をきけともきかさるかことくなるハこのたひ」三惡道よりいて、つミいまたつきさるもの也［六〇・オ］又經にもとかれて候又この世をいとふ御心う」すくわたらせ給ふにて候そのゆへハ西國へく」たらんともおもはぬ人に船をとらせて候はん」にふねのミつにうかふ事なしとハうたかひ」候はねとも當時さしているましけれハ」いたくうれしくも候ましきそかしさて」かたきの城なんとにこめられて候はんかから［六〇・ウ］くしてにけてまかり候はんミちにおほきな」る河海なんとの候てわたるへきやうもなか」らんおりおやのもとよりふねをまうけて」むかへにたひたらんハさしあたりていかハ」かりかうれしく候へきこれかやうに貪瞋煩」惱のかたきにしはられて三界の焚籠」にこめられたるわれらを彌陀

名号の利剣

本願の要船

悲母の御心さ［六一・オ］しふかくして名號の利劍をもちて生死」のきつなをきり本願の要船を苦海のなミ」にうかへてかのきしにつけ給ふへしとお」もひ候はんうれしさハ歡喜のなミたたもと」をしほり竭仰のおもひきもにそむへきに」て候せめてハ身の毛いよたつほとにおもふ」へきにて候をのさにおほしめし候はんハほい［六一・ウ］なく候へともそれもことハりにて候つミつく」る事こそおしへ候はねとも心にもそミて」おほえ候へそのゆへハ無始よりこのかた六趣に」めくりし時もかたちハかハれとも心ハかハら」すしていろ〳〵さま〳〵につくりならひ」て候へハいまもうゐ〳〵しからすやすくは」つくられ候へ念佛申て往生せはやとおもふ［六二・オ］事ハこのたひハしめてわつかにきゝえたる」事にて候へハきとハ信せられ候はぬ也そのう」ゑ人の心ハ頓機漸機とて二しなに候也頓機」ハきゝてやかてさとる心にて候漸機ハやう〳〵」さとる心にて候也物まうてなんとをし候に」あしはやき人ハ一時にまいりつくところへ」あしおそき物ハ日くらしにもかなハぬ様［六二・ウ］にハ候へともまいり心たにも候へハつゐにハとけ」候やうにねかふ御心たにわたらせ給ひ候はゝ」とし月をかさねても御信心もふかくなら」せおハしますへきにて候」

年月を重ねても御信心も深くならせおわしますべきにてそうろう

臨終の善知識

一日ころ念佛申せとも臨終に善知識にあ」はすハ往生しかたし又やまひ大事にて」心ミたれハ往生しかたしと申候らんハさも［六三・オ］いはれて候へとも善導の御心に

断末摩のくるしみ

阿弥陀仏の力にて正念になりて往生す

てハ極樂へ」まいらんと心さしておほくもすくなくも」念佛申さん人のいのちつきん時ハ阿彌陀」ほとけ聖衆と、もにきたりてむかへ給ふへ」しと候へハ日ころたにも御念佛候ハ、御」臨終に善知識候はすともほとけハむかへ」させ給ふへきにて候又善知識のちからに［六三・ウ］て往生すと申候事ハ觀經の下三品の事」にて候下品下生の人なんとこそ日ころ念」佛も申候ハす往生の心も候はぬ逆罪の人の」臨終にはしめて善知識にあひて十念具」足して往生するにてこそ候へ日ころより」他力の願力をたのミ思惟の名號をとなへて」極樂へまいらんとおもひ候はん人ハ善知識の［六四・オ］ちから候はすとも佛ハ來迎し給ふへきにて」候又かろきやまひをせんといのり候はん事」も心かしこくハ候へともやまひもせてしに候」人もうるハしくおはる時にハ斷末摩のくる」しみとて八萬の塵勞門より無量のやまひ」身をせめ候事百千のほこつるきにて身を」きりさくかことしされハまなこなきかこ［六四・ウ］とくして見んとおもふ物をも見す舌のね」すくみていはんとおもふ事もいはれす候也」これハ人間の八苦のうちの死苦にて候へハ本」願信して往生ねかひ候はん行者もこの」苦ハのかれすして悶絶し候ともいきの」たえん時は阿彌陀ほとけのちからにて」正念になりて往生をし候へし臨終ハかミ［六五・オ］すちきるかほとの事にて候へハよそにて」凡夫さためかたく候た、佛と行者との」心にてしるへく候也そのうゑ三種

臨終正念と仏の来迎

の愛」心おこり候ひぬれハ魔縁たよりをえて正」念をうしなひ候也この愛心をハ善知識」のちからはかりにてハのそきかたく候阿」彌陀ほとけの御ちからにてのそかせ給ひ［六五・ウ］候へく候諸邪業繫無能礙者たのもしく」おほしめすへく候又後世者とおほしき」人の申けに候ハまつ正念に住して念佛」申さん時に佛來迎し給ふへしと申」けに候へとも小阿彌陀經にハ與諸聖衆」現在其前是人終時心不顚倒卽得往生」阿彌陀佛極樂國土と候へは人のいのちおハ［六六・オ］らんとする時阿彌陀ほとけ聖衆と、もに目」のまへにきたり給ひたらんをまつ見まい」らせてのちに心ハ顚倒せすして極樂にむ」まるへしとこそ心えて候へされハかろき」やまひをせはや善知識にあはハやといのら」せ給ハんいとまにていま一返もやまひなき」時念佛を申して臨終にハ阿彌陀ほとけの［六六・ウ］來迎にあつかりて三種の愛をのそき正念に」なされまいらせて極樂にむまれんとおほ」しめすへく候されハとていたつらに候ぬへ」からん善知識にもむかハておハらんとおほ」しめすへきにてハ候ハす先德たちのおしへ」にも臨終の時に阿彌陀佛を西のかへに安」置しまいらせて病者そのまへに西むき［六七・オ］にふして善知識に念佛をす、められよ」とこそ候へそれこそあらまほしき事に」て候へた、し人の死の縁ハかねておもふに」もかなひ候はすにハかにおほちみちにてお」ハる事も候又大小便利のところにてし」ぬる人も候前業のかれかたくて

往生を求め願うにその便宜を得たること念仏にはしかず

念仏相続のこと

たちかたな」にていのちをうしなひ火にやけ水におほ［六七・ウ］れていのちをほろほすたくひおほく候へハさや」うにてしに候とも日ころの念佛申て極樂」へまいる心たにも候人ならはいきのたえん時」に阿彌陀觀音勢至きたりむかへ給へしと」信しおほしめすへきにて候也往生要集」にも時所諸縁を論せす臨終に往生をもとめ」ねかふにその便宜をえたる事念佛には［六八・オ］しかすと候へハたのもしく候」

このよしをよミ申させ給ふへく候八つの事」しるしてまいらせ候これハのちに御たつね」候し御返事にて候」

一所作おほくあてかひてか、んよりハすく」なく申さん一念もむまるなれハとおほせの」候事ま事にさも候ぬへした、し禮讃の［六八・ウ］中にハ十聲一聲定得往生乃至一念無有」疑心と釋せられて候へとも疏の文にハ念々」不捨者是名正定之業と候へハ十聲一聲に」むまると信して念々にわする、事なく」となふへきにて候又彌陀名號相續念とも」釋せられて候されハあひついて念すへきに」て候一食のあひたに三度はかりおもひいてん［六九・オ］ハよき相續にて候つねにたにおほしめし」いてさせ給ひ候ハ、十萬六萬申させ給ひ候ハ」すとも相續にて候ぬへけれとも人の心ハ當」時見る事きく事にうつる物にて候へハな」にとなく御まきれの中にハおほしめし」いてん事かたく候ぬへく候御所作おほくあて、」つねにす、をもたせ給ひ候ハ、

おほしめし［六九・ウ］いて候ぬとおほえ候たとひ事のさハりありて」かゝせおハしまして候ともあさましやかき」つる事よとおほしめし候ハゝ御心にかけ」られ候はんするそかしとてもかくても御」わすれ候ハすハ相續にて候へし又かけて候」はん御所作をつきの日申いれられ候はん」事さも候なんそれもあす申いれ候はん［七〇・オ］すれハとて御ゆたん候はんハあしく候せめての」事にてこそ候へ御心えあるへく候」魚鳥に七箇日のいミの候なる事さもや」候らんえ見およはす候地體ハいきとしいけ」る物ハ過去のちゝハゝにて候なれハくふへき」事にてハ候ハす又臨終にハさけいをとりき」にらひるなんとハいまれたる事にて候へは［七〇・ウ］やまひなんとかきりになりてハくふへき物」にてハ候はねとも當時きとしぬハかりは」候ハぬやまひの月日つもり苦痛もしの」ひかたく候はんにハゆるされ候なんとおほ」え候御身おたしくて念佛申さんとおほし」めして御療治候へしいのちおしむハ往」生のさハりにて候やまひハかりをハ療治は［七一・オ］ゆるされ候なんとおほえ候」

二の事の御たつねしるしてまいらせ候」よく〳〵よみ申させ給ふへく候」

拾遺黒谷語録巻下」

愚見のおよふところ集編かくのことし［七一・ウ］しかるに世の中に黒谷の御作といふ文おほし」いはゆる決定往生行相抄本願相應抄安心」起行作業抄九條の北の政所へ進する御返」事（かの御返事に二通ありこれハ三心をのせたる本なり）この文とも」ハ餘の和語の書に文章も似す義勢もた」かへりおほきにうたかひあるうゑにふる」き人偽書と申つたへたりしかれハこれを［七二・オ］いれす又廿二問答とて廿六七張の文あり又臨」終行儀とて五六張の文あり眞偽しり」かたしいさゝかおほつかなきによりてこれを」のそけり又念佛得失義といふ文あり上人」の御作といへりしかれともこれハまさしくあ」らぬ人のつくれる文也このほかにま事」しからぬ文二三本あり中〳〵にいふにた［七二・ウ］らぬ物とも也およそ二十餘年のあひた」あまねく花夷をたつねくハしく眞偽を」あきらめてこれを取捨すといへともあやま」る事おほからん後賢かならすた、すへ」し又おつるところの眞書あらハこの拾遺」に續くへし心さすところハ衆生をして」淨土の正路におもむかしめんかためなり［七三・オ］あなかしこ〳〵

望西樓沙門了慧謹疏」

語燈錄瑞夢事」

嵯峨に貴女おハしき後世をねかふ御心ふか」くして往生院の善導堂に御參籠ありて」往生をいのり申されけるに御ゆめに善導和」尚一卷のまき物をもちてこれハことハ

のとも」しひといふふみ也これを見て念佛申さハ決定［七三・ウ］往生すへしと
てさつけさせ給へハよにうれし」くおほえてうけとらせ給へハゆめさめぬあり」かた
くおほしめしてかゝる文やあると諸方」を御たつねあるにすへてなしさてハ妄想に
て」やありつらんとてかさねて御參籠ありて」祈請申されける時二尊院往生院兼參
する」本心房といふ僧善導堂へまいりたりけるに［七四・オ］この事を御たつねあり
けれハ本心房申ていハ」くことはのともしひと申文ハ語燈錄の事にて」そ候らん法然
上人の御書をあつめたる文にて」候とてかしまいらせたりけれハよろこひてこ」れ
を御らんするに往生うたかひなくおほえさせ」給けれハやかてう□さんとおほしめし
たちけ」る夜の御ゆめに束帯なる上臈の二人兩方に［七四・ウ］たゝせ給たりける
をいつくよりいらせ給て候そ」と申されけれハわれハこのことハのともしひの守」護
のために北野平野の邊よりまいりて候也と」おほせられけるに又そハに貴けなる僧の
あの」上臈ハ北野天神平野大明神にておハします」也一切衆生の信をまさんする聖
教なるあひた」三十神の番々にまハりて守護せさせ給そとお［七五・オ］ほせらるゝ
とおもひてうちおとろかせ給ぬこと」に貴くおほしめしてこれをうつしてつねに」見
まいらすれハ往生の事ハいまハ手にとりたる」やうにおほえ候そとまさしく御物かた
り候き」と本心房つたへ申しきさてその□り一心に御念」佛ありて正和元年壬子八

月に三日さきたちて」時日をしろしめしてわれハこの月の四日の卯［七五・ウ］の時に往生すへしとおほせら□けるか日も時」もたかはす八月四日卯のハしめに高聲念佛百三」十遍となへて御こゑと、もに御いきと、まら」せ給ひき御とし廿九とうけ給ハりきくハしくは」語録驗記のことし云善導の御さつけ神明の御守」護かた〳〵たのもしくおほえては、かりなから」これをしるすところ也およそこの録を見て［七六・オ］安心をとりて往生をとけたる人おほし」くハしくしるすにおよはす云云」

元亨元 年辛酉のとしひとへに上人の恩」徳を報したてまつらんかため又もろ〳〵」の衆生を往生の正 路におもむかしめん」かためにこの和語の印板をひらく」

一向専修沙門南無阿彌陀佛圓智　　謹　疏

［七六・ウ］

沙門了惠感歎にたへす隨喜のあまり七」十九歳の老眼をのこひて和語七卷の印」本を書く」

元亨元 年辛酉 七月八日終謹疏」

法橋幸嚴卷頭」